特219
444

建部山比子

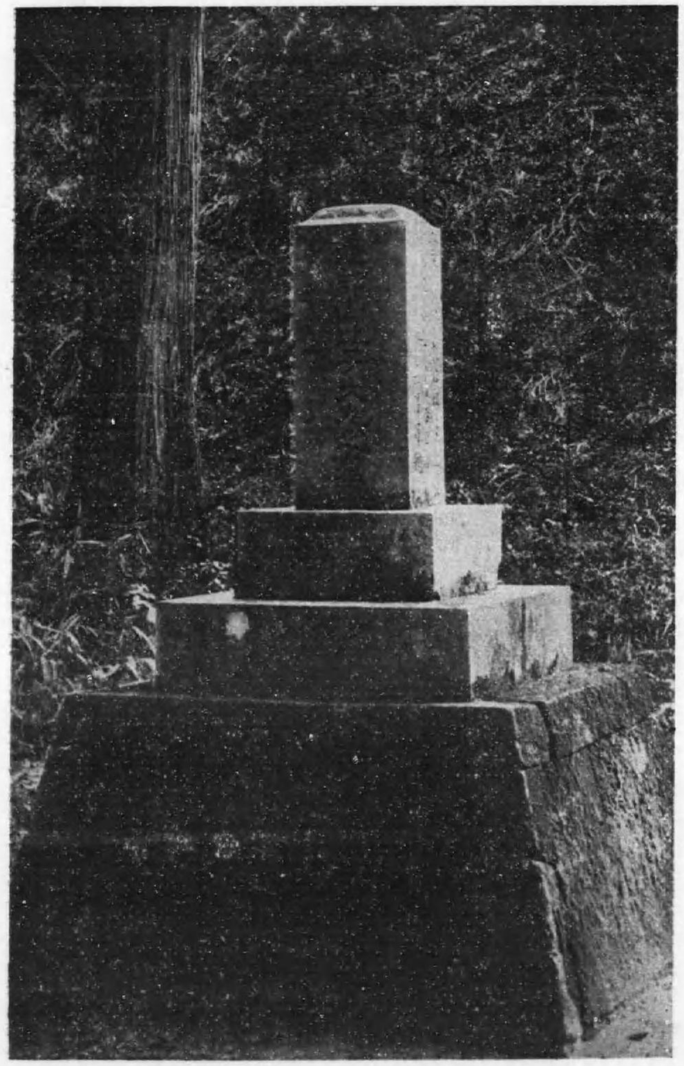
始

特219
444

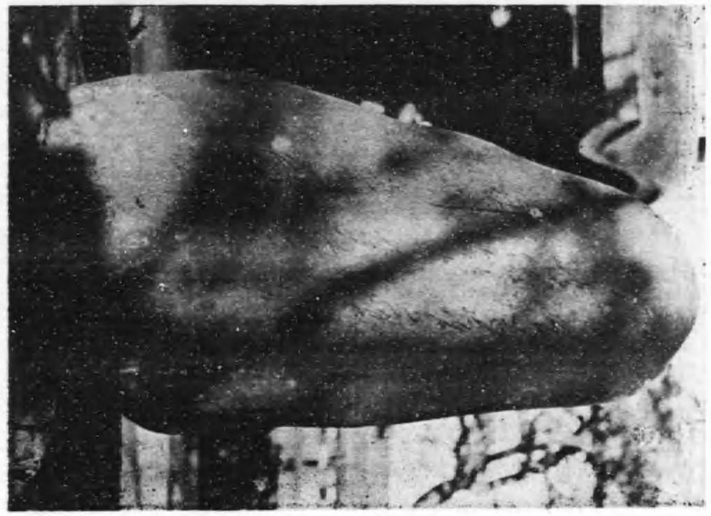
建部山比子

上野甚作著

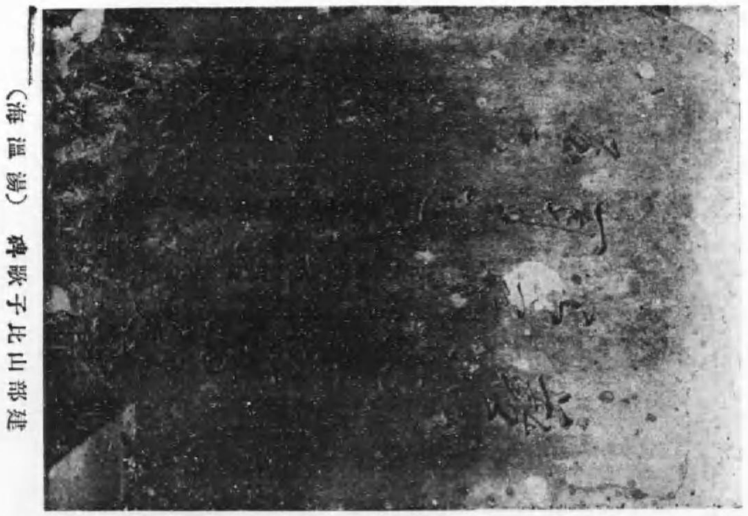
莊內歌人研究第一篇



（中山峯金）墓子比山部建



建部山比子　碑面寫墓子比山部建（寺樂禍）



建部山比子　碑陰子比山部建（湯温海）

建部山比子

私は不器用な性質で百姓として草鞋を作つても縄を綯つても滿足に出來なかつた、昔小學校に居た時分は淸書のある毎に最後か、其一枚上に張り出されるのが常であつた、他の學科であれば不出來であつても、張り書きのように多くの人眼にふれる事なくすむので、冷汗を流してもそう長い時間ではなかつたが、二週間も三週間も張つて置かれるのはやり切れない少年の苦痛であつた、しかして手本を見て習つても上達する樣な生徒ではなかつた、其後小學校を出て農業に從事し、そうした記憶も薄らぎ何年か過ぎて、遇然の氣紛れから字を習つて見ようと思ひ立ち、求めた數十種の拓本や法帖の中に、春來帖と題した美濃紙十枚位の、全部萬葉假名で書いた一帖があつた、鶴岡に於て刊行されたものである、字くばりや書き直しのその儘になつて居るのを見て、最初から計劃したものであるならば體裁もあらうにと思つた事であつた、次の如き序文及跋文がある。

序　文

古の假名の筆の跡を見てさだめあへる賢き人々の論のとりどり聞ゆる、三蹟三筆などには諸越の二王などの草の手見るやうにて、世のかいなての目にはふとはよみ難き方もあなれば、專らより難し、中昔の上手の書けるをよく撰び取り交じへて學ぶべし、さては誰もめ易すかるべき業なりと言はれたれど、比呂美が萬に古き樣を好む心習ひにば、なほ如何にそやと思ひこしを、此頃佐藤方定主、此春來帖と名づけたる持來て、その手學ぶ弟子に序を乞はれたれど故あれば己に代りてよとあるに、先づ開き見て驚かれぬさるは、紫の名に高き秋萩帖やうの帖を、年比よく學ばへでは如何でか斯くは書き得べき、今の世には有りかたがるべき假名の手なるべしこは如何なる人の筆ぞと言へば、出羽國莊內の殿人建部山比子主なりと答ふるに、さるは音に聞きつるかひありて、賢くも定めてけりと頗笑まれて猶かへさひ見もてゆくに、かの萩か枝の打しなえ花に匂ひ、得ならぬ中には秋のを鹿の花つま、しがらみ伏せたるがごと打ち亂れて、あやしく傾がるゝ姿なるは見へず、やゝこちよりたる、はた打交りて見ゆれど、それやがて某の說にもおのづから叶ひ又ある博士の家に傳はれる臨風抄の趣にも大方たがはざめれば、かの時ことにひたすら從ひて、世に歌ぶみなど雅びて書かん人の手習ひには、此帖を置てはと打つけ言せるを、あはれ是ぞ此手の

主の心なるを、其儘とく書き付けてよと强ひて言はるゝに、否むべき中にもあらねばとてなん、かく言ふは尾張人平野比呂美男高雄書

跋文

大かた歌よむ道にすぐれて筆とるわざに妙なる人は世に稀なるを、その二つを兼ね得たるは我友建部山比子になむありける、躬は下ながら心は天雲に立のぼり、ゆゝしき大和魂よりなりいてたる言の葉にしあれば、其しらべいとたかういにしへの手ふりありて今の世にへつらふ、姿なと更になかりけり、その歌をみて其の人の心しらひをもしりぬべし、うべこそ藤原貞直卿も見そなはして、水莖のきよらにして歌のしらべ雄々しくみやひたるをいたくほめ給ひき、さるを惜しきかも此年ころ手あしなへて病にわつらひて、ものいふことだに心まかせねば萬のわざさへたへにたり、其敎子大瀧惠迪等ふかく之をなげきて、十年ばかり前に書きおけるをいさゝか梓にえりて世につたふ事とはなしぬ、こは其烏のあとさえ歌のさまのうせざらむよみのわざなれば山比古の心ゆかましやは、あはれ身のいたつきのなからましかば、自ら撰びなましものをいとあたらしうあかぬ心地こそせらる、天保巳亥春友人源禮孺

尾張の平野比呂美は、此序文を佐藤方貞と云ふ人に賴まれて書いたものである、比呂美は尾張に居たものか或は江戸に居たものかを審にしないがひとかどの學者であつたらしい、跋文によつて山比子の弟子達は晩年中風に罹かつて再起不能である師匠のために、もう昔日の雄渾な筆をふるふ能はざるを悲しんで、以前に書いてあつたものを出版した事も從つて特に意途して書いたものでない事も明らかになつた、思ふに病床にある師を慰めるために子弟相謀つてこの美擧をなしたのである、即ち天保巳亥の年は山比子の歿年に當り、其年の五月三日に死去したから、恐らく山比子は春來帖の上梓を見ずして寂しく逝いたのではなからうか、山比子に就いて私の知り得る範圍は是以上に出なく當時は禮孺方貞惠迪共に如何なる人かを知らなかつた、又山比子富小路貞直に歌を學んだと言つても、堂上歌人を尊重した氣分を持たない私は詠草を幸便に托して送り添削を乞ふたのだから、今日でいふ通信教授より尙手ぬるい譯でそう重要視した考へもなかつた、又予の疎懶手習も遂にそのまゝにして果し得なかつた。

嘗て半日の閑を得て金峯山に登り予の好古癖は所在に田中の石碑を探り、山門の前に至りて山比子の石碑を見るに及び春來帖の出版といひ、斯く立派な石碑といひ師弟愛の美しい情誼によつて建てられたものであらう事を思ひ、其人を知りたいと考へるに至つた、碑には萬葉假名で次の文が刻まれてある。

建部山比子大人之墓

建部翁またの名は敬義と云ひて正しく健き人となも有けるを、幼きより歌よみ字書く事功く勉て歌は藤原貞直卿の御教を受け奉りて、古今の高き調を取りて自然に一風を詠み出でだり、書は和漢の名立る蹟を遺る隈なく習ひ得て一家をぞ成したりける、是を以て其殿命美給ひ稱給ふ事度まねくなも有けるを、惜しきかな哀きかな、齡は六十二にて天保の十年といふ年の五月の三日の日なも、天かけり國かけりて冥府に參ひ向はせりける、かれその弟子等諸共に此碑を建るに依りて、其可美名の好き名を千名の五百名に語繼ぎ言ひ繼がむ、其の文をと請ふまに〳〵斯くなも記せるを、猶百千の一になも、かく言ふは皇京の人源朝臣重胤　弘化二年乙巳仲春大泉源泉書

鶯の木つたふ枝にふる雪は聲のたよりに花かとぞ見る

一面に山比子の手になりたる歌を刻してある臺とも一丈もあらう堂々たるもので私は石摺をするために秋の半日をそこに過した。

弘化二年は天保十年歿後を過る六屋霜を經て居る、しかして鶴岡の町にあゝした堂々たるものを建てることは、御給人級の人としては恐らく當時にあつては憚があるので、金峯山中の地を撰んだものかと思はれる、此石碑によつて山比子の歿年から逆算して安永六年生れであることも知られ昭和十四年を去る百年以前に歿したことになる。

古來有名なる詩人有名なる歌人は社會的に惠まれたるもの至つて少ない、その例に漏れず山比子も薄命の一人であつた、池田玄齋が杉山廉女傳に言ふ、師は極めて慈悲深き御本性にておはせる事は、建部山彦など誰彼窮せる頃は自らもいと貧しうおはしながら、米錢など折々送り賑はし給へること予まのあたり見たり、女は老いてます〳〵客なるものなるに露も鄙客の御心なかりき、しかはあれと御門弟の内に不良のものあれば三度までは嚴に宥め諭し給へど、其道を改めざる時は擯斥して師弟の誼を絶たれし族もありき、予山彦など其中に入りて彼等が道を悔ひて自から新にせるを待ちて懇に謝し奉り、再び會の席にも出るごとにもなりぬれば少しも憎み玉ふ御容子なく顏色霽然としてありし如く敎へ給へりと、山比子の壯年時の事と思はれるが二人扶持か三人扶持の御給人であつたのだから廉女の施を受けるほどに窮して居たことが知られる、彼が經濟的に惠まれない環境の中に成長

し、努力した其の暗い影が書風の上にも亦短歌の上にもさして居ることは否めない。

爾來其片鱗だにも知りたいものと心掛けて居た、ある機會に大瀧惠迪の所藏して居つた色紙型の綴本に古歌十九首山比子作歌十五首を萬葉假名で書いた一冊を購ひ得た、其奥付に四十四才の時に書いた記載がある、山比子は初め小野道風の秋萩帖を習得し後に王義之を學んだと世間に傳へられる、當時既に書風の轉換して居つたことを知り得る、其後齋藤治兵衛翁が山比子歌集の所藏せられて居るのを聞き、借用した田林友睦筆の善本である事を確めそれを筆寫した、尙山比子に關しては池田玄齋の弘采錄及病間雜抄に記載のある事を知り酒田市光丘文庫にて閲覽した、病間雜抄に石田畔見谷口躬風の三人を評した中に、山彦も人柄は良きものなれど我慢强し、と言つて居る、我慢强いと言ふ意味は苦痛を濫りに他人に訴へないと言ふのであらうと思ふが蓋彼の境遇がそうさせたものと思ふ、書風にも獨自の個性を充分發揮して居る、初期には王陽詢風の字を書いた秋萩帖を習得して以來書風一變した、殊に晩年のものは殆と總てが萬葉假名で書かれ一種の風格を存して居る、我慢强い個性の所有者でなくては良くこの境地に至り得ない、莊内藩に於て刊行した五人組掟は藩の命に依りて書いたと言はれるが、多士儕々の間にありてこの命を蒙りたるは書

道に於て、社會的に廣く認識された結果で山比子としては頗る面目を施した譯である、莊內人名辭書に依れば御祐筆と見えるが、莊內藩士錄の中は建部なる姓なく玄齋の春來帖の跋にも身は下ながらとあり、玄齋自身も百石餘の家だから玄齋がそう言ふ位だから御祐筆ではなく單に五人組掟を書いたと言ふ程度に過ぎないかと思はれる、山比子に公生活の記錄は見當らないが町家や農家の子弟を敎授し大瀧惠迪、今野收助、佐藤行道など其門下から師恩に報ゆる事を忘れない篤實の士を出した事は多とするに足る。

弘采錄に、建部山比子はいつも言ふが如く虛高なる性質にて、詠歌も無學なる故けしからぬえせ歌のみ多けれども、數十年此道に心を盡したるはさすが憐むべし、百首詠みたりとて昔見せける中に大泉歌集にも入れま欲しく二三首撰みたり。

櫻　打はへて猶降る雪と思へばや春さりげなく雪の降るらん

　　色ごとに咲ぬものから櫻花人の心にあかず見せつゝ

朝　貌　朝貌は心つからにうつろへば風にも花はさはらざりけり

櫻　衣　秋の夜の月かげ淸く照る時ぞきぬたの音もうちまさりける

水　鳥　をし鳥の獨はなれてなく聲はおなしえにとや戀わたるらむ

初　蓬　水の泡のみは浮きながら流れ來てうれしきせにも逢ひにけるかも

竹　夏の風そよきなれぬるくれ竹のつかき夜床は臥しよかりけり

橋　天の川渡す浮木のはしもかな浮世の中もかけ離れなむ

是等はまづ歌らしきものにて其餘は一笑に堪へざる歌は、「鷹狩、彥星も片野を過ぎてとかりせよ棚機妻に逢ふ事もあらむ」伊勢物語をうろ覺に詠めるか誑惑の顏あふ事もあらんの留めなど俗言俗意にて歌にならぬもの棚機つめに行きも逢ふや、とならでは留らず萬事皆如此

玄齋數十年の友なれば人柄は能く覺えたり正しき魯鈍の方の者にて、心を知ればにくき事もなけれども、打見たる樣のわれは顏なるもの故人々はにくきものに思へり、これは一筋に高尙を守りたれど無學なる故己が胸を人に見透されじと、强てうべ〳〵しうもの知り顏をせる爲めぞかし、堀口眞五が如く奸曲のみなどゝは天淵の隔あるべし、いつにても訪ひゆけば山彥悅びて枯魚濁酒などを出し昔今の物語をして興に入りにき、近年中風にて手足も言舌も不遂ゆへ月にうとうとしうのみぞなりにたれど心にはいと憐れに覺ゆ、遊六郎殿に來て春の歌を詠じたり。

矢田の野に春は來ぬらし荒乳山峯の淡雪かすみたなびく

固大人打笑ひ鎌倉右府の亞なりと稱し給へるに、いともいとも不興氣に歸り夜食も喰はず寢たる故、妻子いづこか惡くおはするやと伺ひしに、否々我は家持憶良の上に立んと思ひ居りしに、今日惣六郎殿に右大臣の次なりと、言はれ胸ふさがり食事も厭になりたりと言へり、固大人金谷小路の宗匠には我等も手つけられぬと仰られき。

以上可なり低く評價して居る、舊藩時代は祿の高下が物を言つたのは勿論で、下級の者は輕蔑され易い傾向は多分にあつた、山比子は無學なるが故に虛高をよそふて居たとは思はれない、鈍重な性質であつた事は確であつた、從つて一つのものを會得するにも大きい努力と犧牲を拂つた形跡は歴然として見る事が出來る、玄齋の無學といふ意味は廣く書籍を讀破しない意味であるならば山比子は玄齋の如く多く本を讀んでは居ないからなづけるであらう、歌の上から言ふならば、けしからぬえせ歌よみかといふに、或は未だ歌と言ふものゝコツを得ない時代のものには、そうした事を言ひ得るであらうが、決算的に見る時は無學だと無責任に放言漫罵し得ない重厚な歌を詠んで居る又玄齋が笑つて居る鷹狩の歌は素材そのものは別として山比子の歌は、玄齋の如く訂正すると作者の意企する感情とは相違する、山彦を評して魯鈍は當らない、一筋に高尚を守りたるは師匠として當然の道である。

予嘗て傳小野道風の秋萩帖の影寫を一見し山比子の全力を傾倒せしを始めて知り得た、秋萩帖は王義之の書いた文字の中から草假名として用ゆべきものを臨書したものと言はれるが、山比子は良く其筆意を体へ更に晩年のものは立派に脱却したと見るべきである、虛高であつたり魯鈍であつては到達し得る境地ではないのである、如何にも謙虛であり鈍重であつたと思はれる、山比子の書は可なり多く殘つて居る、初期のものは全然別人の書かと思はれるものであるが絶えず努力を怠らなかつた、百首歌、昔と言つてゐるから時代は明でないが晩年に達する修業中には、種々の道程を經べきであらう器用でない彼の性格は、人一倍苦しまなければならなかつた。

白井固との挿話も笑草とせばそれ迄であらうけれど、兎も角彼の詠歌は三代集の傾向を脱する事能はざりしも、尙家持憶良を目ざして努力したといふ參考にはなる、山比子には無理な語法もあり、新造語を考へて苦しんだ形跡もとゞめて居る、萬葉集を目ざしても餘りに三代集に深く親しみ、如何にあがいても萬葉集には到達しかねた、晩年に近く山比子

は金谷小路に住んで居た事も知られる。

病間雜抄の中に玄齋山比子歌合が載つて居る、本之は山比子、禮孺は玄齋である。

左　賤が家の秋は露しく稻むしろぬれて見る夜の月ぞ身にしむ　禮孺

右　をしねかる小田のかりほの秋たけて露をく床に月ぞもりくる　本之

左右いづれともわかつがたき御歌珍重々々

賤が家も小田のかり庵もきりこめて光すくなき秋の夜の月

里　擣　衣

左　萩の葉の色つく里は今よりやつぎて夜な夜な衣うつらむ　本之

右　秋さむみ夜も深草の里人は露にぬれつゝ衣うつらし　禮孺

これまた兩首とも宜しく侍り、萩の葉の色つく里の方詞つゞきまさり侍るか、持と申侍らむ

暮　秋　露

左　枯初る草葉の露になく虫の聲弱りゆく秋ぞ悲しき　禮孺

右　もの思ふ尾花がもとの草の葉も露にぬれそふ秋の別路　本之

枯れ初る草も尾花もおしなべてあはれぞ深き秋の夕暮

の何れも首尾相叶聲よはりゆく虫の衾、尾花がもとの草がれ聲よはりゆく虫勝まけの爭をつく道も覺侍らずおもしろくこそ

初　戀

左　うつろはむ後をば知らす月草の色にぞ深く思ひ初めにし　本之

右　しをりして今日ふみ初る戀の山深き道にや思ひ入るらむ　禮孺

月草にうつる心もあさけれや戀の山路はわきぞかねつる

いづれも〳〵抔と申侍らんは、見わくるすべも知らぬあざけりも侍るべけれどおもひわくかたなし、然れども左はありふれたるかたにて、左人の心我ながら定なき處すこしまされるにや

逢　戀

左　思ひ初めつゝにあふ夜の床夏の露にとけゆく花の下ひも　禮孺

右　初川をわたりおほせし今雲よりのちのふち瀨の變らずもがな　本之

常夏の花にありそふ染川は直衣の色にはえまさるらむ

左宜しく侍り右もあしくは侍らず候へ共、初川耳に立おほせしも少けやけき方に聞ゆべし、下の句に至りては殊に宜しく侍れど、上の句をとり侍るまゝに左を勝と極め侍る、扨此一卷只今までの中になき御出來珍重めでたし

閑中秋　　宗孝

左　松の風鹿のなく聲寂しきは同じ心の山の隱家

右　人しれぬ林かくれの宿なれば何をか秋のよすがにぞせん　　本之

左まさりて侍り右秋のよすがは月もあり、紅葉は其まへなるべし

いづこにか秋のよすがはなかるべき只身にしむは夜半の松風

この一卷判者の署名を脱して、はつきり言ひ切る事は出來ないが、恐らく杉山籠女であらう、年代は不明なるも從來しばしば歌會を行つた事は、この一卷は殊に佳作であるといふ評者の言によつて推定される、當時斯くの如く歌に關して造詣のあるもの籠女と斷ずるより外なく、本之は努力によりて歌を詠み、禮孺は才によりて詠んで居る、これ兩者の相違点で長所でもあり短處でもある、最もこの歌卷は山比子は一二年の年少であり玄齋は年長であつたが、歌の上からは魯鈍視するのは思ひあがりである、山比子は刻苦し勉勵して

進んだ、他人は一年で出來るものを三年もかゝつて、こつこつと倦まずたゆまずに歩くといふ人であつた、他から齒掻ゆい位に見えた事と考へられる、そういふ人は非常に自尊心が高く自ら把持するものがある、青年時代に習得した王陽詢の書風を捨て王羲之の書風に到達した事は一大飛躍であり、眞實一路目ざす處に邁進する向上心なくしては、この結果を得る事は出來ない、人は他人の長所や優れた點は容易に發見し得ない、目前の小事にこだはつて品隲したがる、玄齋も山比子は尊敬に價するものとは考へて居なかつた、けれども臨終に近い時期に及んで春來帖の跋を依囑されたので、其絶望の聲を聞いて漸く果した、若しも山比子健康であつたならば、恐らく跋文は書かながつたかも知れない、書いて贈つても內容の變つたものとなつて居たと思ふ。

弘采錄に

建部山彦が書たる春風帖(作一春來帖)の跋を托されたれど、忙くして捨おきつるに山彦中風症打募り、もはや命期旦夕に迫れり、心はたしかなれば生前よみ聞かせ致しとの事にて急につゞり遣したるに、今野収助枕がみにてよみ聞かせたるにいと悅べる顏色なりしとぞ、手足不遂のうへ音舌まで叶はねば、げに無慘なる病症といふべし可憐ものなり。

と此間の消息を書いて居る、要するに玄齋の春來帖の跋は山比子への弔詞なのである、弘采錄に春來帖の跋を載せ其後に「この山彦も予の數年の友なればかく稱しておくれりと誌してゐる、更にこの間にありて、門弟等の師に對しての心つくしの一方ならぬもの、有りしは春來帖の序文にて知らるゝが、玄齋もひどく感動したと見えて

門人大瀧增吉惠迪といふ男實體なるものにて、師に仕ふる事大方ならず言志感ずるにたへたり、京人佐藤方定も惠迪が厚誼古人の風ありと稱せり

と感激して居り更に、

建部山彦も醫藥のしるしなく遂に今日物故せるよし訃音あり、固大人と同月同日に死しこそ不思議なれ、一體人がらの惡しからぬ男ゆへ可憐事なり、年も固大人と同齡にや六十二か三なるべし五月三日夜なり、追善の歌もしたゝむべし、五月四日行て弔ふ六十二のよし三首手向たり。

千代かけて朽せぬ玉のこゑはあれどなき數に入る君をしぞ思ふ

昨日まで問へば答へし山彦の音つれ絶へし今日にもあるか

ななげきつゝ老の涙にかきくれていとどみだるゝ水莖のあと

十日に立派なる膳部菓子など贈り遣しくれたり、家内の心つかひと見ゆ氣の毒なる事なり。

山比子の死去により玄齋も恩怨のあなたに立つて心から同情してゐる、この間にありて弟子達は一方ならぬ心つくしをした事であらう事も察せられる、葬式がすむと墓石に關しての相談があり、如何にすべきかの協議があつた事は弘采錄に

この頃建部山彦の春來帖の跋をも作り、江戸京へものぼせしなどいへるはいと耻しけれど、これは山彦元來杉山檗女の同門にて、數年の懇友なれば辭し難き筋もある故なり、山彦の碑も草案は予に書きくれとの、門人よりの頼みなれば書き贈れれり、歌も彫刻せまほしといへり、幸に山彦生前認置たるよし。

鶯の木つたふ枝に降る雪は聲をたよりに花かとぞ見る

手蹟も殊にみごとに出來、うたも山彦が歌にはよく見ゆれば、これ彫りて然るべしと予もいへり、和文は富小路貞直卿に頼み、漢文は林大内記殿に頼み、和漢兩文にして漢文は極樂寺の墓所へ建て、和文は金峯山へ立るよし、兩方へ予の草案をのぼせ度しとの事にて、又筆をとる事になりぬ。

春來帖も山彦死後出版され、友人知己等に頒たれて門人等は其素志を果し、更に碑文の問題となつた譯である、碑文は富小路貞直と林大内記に依頼したのであつたが、富小路貞直の方は既に老年に及び、謝禮の金は途中に於て横領消費され其中歿してしまつた、佐處方貞の書翰に依りてこの間の消息を窺ふ事が出來る。

建部老翁の碑文の沙汰　　大鳥舍方定

建部老翁の奥つきに物せられたる、碑文をよしあし言ひおこせと見せ給ひて後、怠り侍る程に、彫り給へるとか、左はれ老翁の靈にも答へよかしと、年頃人々音信給ひしにもいらへ參らせんと、其文共を机にのせて讀み渡しに、君のこの碑に心盡しとひおこせしなど吉利ぬしのいみじきわざにていそしまれしを、事問ひかはしなどを讀もてゆくに、あしあしのあげつらひはさしおかれて、建部の翁はよき敎子を持たれけるかなと、大泉の殿の君はよき大御寶を持ちたまへるものかなと、何よりも先涙さしぐまれて共に其すめにいそしまれけるとめでゝ、

とり見ればかれて年ふる言の葉にあらぬ時雨のなどかゝるらむ

と歌ひ六日の菖蒲の名に負ひながら、御墓の文は武々しく古ぶりにめでたくいできたれば方定ら、とかく言ふべきに非らざれども、葦の一よの一ふしも思ひ得たらんには、友垣の交じらひをなどか、もだへあるべきにもあらざれば、いささむら竹いささかに言ひてんとす、抑人の物せるにおもとかんは腹くろく、なめしきわざにもなりゆかん事のつつましけれど、千歳の後に傳へんと千里の外の雲井の雁にたぐへて、音信給ひしをだにやはとて、仲つものかきつめたらむ中に、拾ひ給はん貝のあらんには、海士の袂の變るまじ

以上の消息に添へて山北子の碑文に就いて、大体左の樣に書き贈つて居る。

碑文は富小路殿も千種殿も埒があかぬ、江戸で誰か書いて呉れる人がないものか、師弟關係のない重胤の書いたのは面白くない、篤志の貴君は京人に欺かれて、富小路殿を差おいては他にない筈なのに、數年たつた、拙生の親友に九條の落胤失明の人にて、歌詠乾紫閣と申仁あり、右の話をして、大瀧某取次人に金を奪はれて碑文の出來ない事を氣の毒がつて居たから、頼み度富小路殿には千疋、同家雜掌共へは百疋、貴殿へ二百疋差上げるから、貞直卿存命中認めた事にして貰ひ度い、そうすれば増吉年來の素望も達し、師にも認められ黄泉の下にて、淡路の因念なき重胤よりは滿足であらうと、申した處承諾をして呉れた、前の裟金は何者が持參したのか、相調べ奸人は慥に取押へ返金させる。

玄翁(玄齋翁)は重胤の文を必ずよしと思ふまいが、小生と違つて君子故禮讓を以て默止せられる事と見る、小生は夫と違つて小人の所業、且貴兄の實に厚情篤志者奸人に數年妨げられて居るのは、如何にも殘念である玄齋の書いた行狀を送つてはどうか、無理にと言ふのではない。

遠國邊鄙とは言ひ乍ら、素企を不達その親情と交際は看るに忍ひざるものありて、同人の文は是非まで論討した事は不敬至極だか御免下さい、若富殿に賴んで先刻を削去り改建るに於ては、小生も削料を靈前へ少々相備へたい、石碑は建替るに及ばない、字面を削取るだけで宜しい碑は千年不朽に殘るもの故、可然再考して下さい、重胤への墓文の論を送るけれども、彫改めになれば爭を好むものではないが難問の文を遣して返事をまつ。といふ意味の手紙を送つた、更に重胤撰する處の碑文を次の如くに評して居る。

建部山比子大人之墓

かゝる處に其名を呼ぶはなめしきやうなり、建部大人之墓とありていかが

建部翁亦名波敬義、こゝに名を誌ささるは上にゆづりて簡なるを主とせられたるめれど、猶名波山比子字敬義として、扨て其父は何々世々出羽國鄉々國々領給有留酒井殿迹仕面云々抔つけ度、文首に名を省きて題辭にゆづりたる例を聞す、題詞に大人とせば本文にたゝみて

大人名は山比子云々と出し度きわざなり。

正久直久武久雄々志伎人止云々

このつゞき家業は更也といひたし、上に武雄を言ひしのみにて武雄なければ、武術者更也とか上の如く家業と云か、さらずは歌よみ手かくのみの樣也、且武雄の應なし、正しき直きといかゝ、武久雄々志伎を雅昆迹となどいかゞ、本の如くにて熟字には難なけど文法如何あらむ、下に歌よみ手書久てふ言あれば、上に雅なるてふ言なくてはふさはしからず又もとの如く上に武久雄々志伎とあらば、下には武雄の言あるべきに、歌書にも武雄にも上下共に照應なく支離なるやうなり。

人止那毛有氣累遠

坐してなどいかゞ、然らば武久雅爾坐而世もとの如にて妨なければ、ことごとしく耳立やうなり、又坐のみ尊詞にてわるくは雄々之久之などいふべし。

是以手、

故とありたし、さらば是以手なき方よけむ、

其殿

ゆくりなく出で何殿なるか辨へ難し、故われ上に酒井殿を置たり、こゝに應じさせんが爲也。

稱給

撫給といはんか、續紀宣命などにいへり、稱給きゝつかず、こゝは殊に君臣の際なれば稱と言ふべからず、殊に小臣なるをや、必撫ならではかなはず、今和學者といふ者儒者などに輕しめられ、異端の如く思はるゝはかゝる差別は知らぬ故也。

天翔理國翔理氏

よくはあれども魂の天降り又憑來る時などには言ど、死行時抔は余りにこもやかなるやうなり、萬葉などの天隱岩戸立隱にけらし、又天雲の五百重上爾又黃泉路遊百不足八十隈路などありて、理にとりてしるきわざながら耳たちやう也、さればもとのめきても難なければ、主の返す〳〵魂のうるはし降らんよらんと思ふ時、天翔國翔もあるべけれども死時はさしも快よからねば往處へ直に引廻し故、續紀誄詞にも、さはる事なくうしろ路も易くとほらすべしと、詔事もあり天翔國翔ては死行とき迷ひたるやうなり、

冥府

古書皆に、天八十隈黃泉などあれど冥府きつかず、漢籍道家などの書こ出たるか撰者に聞かまほし、慥に出る處ある熟字なるべく左あらずとも、幽冥に到る魂の習なれば妨なけれど、皇國の書にさる例なければ穩かならず。

其翁

老翁と書例也、翁と書く時はオキナ也、ヲヂの時は老翁とかく、今いつれにも翁とせしは撰者據あるか、自己の卓見か問ふべし、こゝも猶上を更て大人とすべし、大人と書かずは初より老翁とか翁とか定むべし、このヲヲタカヘルノミナラス、直モポを誤りたるべし

弟子

弟子のみありて實子なきが如し、故其名子誰弟子大瀧惠迪などゝすべし、弟子のしわざなり共實子見てもだあらめやは

此碑云々、是よりかくてもまゆれば難なかるべし、然れ共かくばかり畧きたる文に、儒者などの人の著書に序などかく時、何々序を乞ふなどある類にて、其文遠止乞といふ字この文末すら〳〵と終まほしき處にくだ〳〵しきやうなり、されどもとの如くにて難なけれ

ば我もとくに非ず、只誠に我意をもて下に言ひてん。

其眞名子某其弟子大瀧惠迪人々止謀而其尊久功支事共乃百千乃一乎磐爾彫而立多禮婆其磐乃共常磐爾堅石爾千代爾傳不行免耶婆

年　月　日　　撰者　國　氏　名

猶しなめしけれどしばし誠に我思ふごとく誠につゞりて、大方本の詞を用て祖父の事を言はずにかゝむ、

建部大人墓誌

かくもやあらむ、猶京へ物せんには別にあとらへ給へ。

○

建部山比子古大人之碑。

漢文ながら皇朝古人の墓誌を許多集て我持れど、未此の如の体を見ず、故又云んとす。

建部翁亦能名波敬義止言手雄々志伎人止　知れ難き古人たりとも、生卒を詳にせんとするは學者の常習也、然るに現在子弟の詳に知る人ありて、本文に誌さで末文に卒年あるは何文體をなす。勿論子孫弟子たるもの其師父を尊敬せざるに似たり。

奈毛阿理計留乎　と言ふ詞が計略めきたる短文にいくつもある又曾は流と留

幼余理歌詠字書久事功久勉賣手　武士たるもの武術は云ふまでもなしと遁辭を言ふべけれども、手や歌の腰ぬけは武士の名を得るにもさのみ功とせざる處なれば、先家業君父に仕へし事を云、次書歌に及ぶべき事也勿論父祖をあらはすは孝行墓誌の主意也。

歌波藤原貞直卿能御教事乎受奉理傳の中　を誌したる字は皆なくてもありぬべし以下准へ。

古今能……　翁近體を詠まざれば古と云ふべし今と言ふべからず。

高伎調取傳自然爾一風乎詠出多理　一家をなしたる程の人其歌も書も上木したる名をだに此文中に入れぬは餘りに事を省過たり、是即下文に云ふは公事宿の願書にて其誠のなき處より起れり。

手波和漢能　翁に方定逢て問ひけるに答へけるは義之を習ひ道風朝臣を學ぶのみなりと言はれたり、今和漢の名家と言ひては翁の師とせられたる小野君を疎々しく書ては靈にかなひ難し、又義之も萬葉のかなにも用たるばかりなれば直に名を出しても良けれども、きら〳〵しくなり漢人にもあれば我も又漢の名立留とせり、千年過ても其人の法によらば即

師也、今小野大人義之先生を知らぬ顔に、とほ〳〵しくうと〳〵しく云て富小路殿のみ師とせし如く云ては道にあらず、翁も存生中我にとかれしもこれにて翁の精神魂魄血氣皆是にとまれり、書道の法翁これに限れり方定小人輩も驚嘆せしは只是也、天下方今小野大人の秋萩帖を學ばんとすれども虎猫の喩に落ちざるはなし、翁卓識高く歌は古今體を得、書は小野大人を熟く得られたるを歎賞敬服せし也、今此文意其意を得ず建部翁の靈に叶はぬ事方定洞知せり、あゝこれを何ぞ文と言はむもし此文をして文ならしむる時は、建部翁其子弟迄師に禮なく道に信なき人と云境におとし入れんとす、假令子弟不告行狀を閲書歌を見ば其德を知るべし、其德を見る事能はず眼力にて人の墓誌を撰に堪んや、故末文に云如朋友師君たる人を見て撰ばしむべし、即其師富小路殿にかゝせ改め給はんやと言ふはこれなり、富小路殿を師とせられど實は貞直卿を學ばず古今集を學ばれたり、是皆千古を師とせられたる人にて尊とすべし、重胤この翁古を師とせし事を知らず、遺奈久學得傳と云文はこれ即翁を知らぬ徵也、翁何ぞ其見なく遺なく書を學ぶべけんや遺りなくと言へば清の達人の書も師としたりとせんか笑ふべし。

名立留師能　和漢の名立るのみいひては數人を學しやうにて心と違めり。

隈無久習悲得手一家遠曾成須有理計留是以　我が直しの如高名になりし故酒井君の賞美し玉ひしなれども、先づこゝに其名高くなりし事を言て後に君より美玉ひし事を言ふが順なり、こゝにても返返上に主君の名をいかゞ、天皇等すら何宮に天下治賜之何天皇又何代の天皇と云にあらずや。

其殿命能　今古學家少の事命と云へどこは其主殿の體をかすかにさして君を言はん方なるべし、又上にも云如く突然と出鄙なり。

美給比稱給布事度滿禰久南無在希留遠惜伎哉悲伎哉　知らぬ人にても其德をしたはん惜しくも哀しきは勿論乍らこゝは、自身惜悲せずとも我云し如く弟子らが惜悲のかた、其孝子順弟等の志を述べてあらはすは文者の法、悲惜の情は子弟等にゆづるべし。

齡者六十二仁手天保能十年止伊布年能五月能三日能日那毛天翔國翔手冥府仁參向波背理氣留故其弟子等諸共爾此碑遠建流爾因手　上にも云如弟子事を取る事厚くとも其子をさし置ては其子を不孝におとすに似たれば、弟子全く事をとりたりとも其子の名をあぐべきに墓誌を書乍ら弟子のみ書て子を書かぬはいかゞ正しく書くは子男何人女何人名は何々と迄かき其妻の出處迄書は文法なる事人皆知るが如し。

其可美名能好名遠千名能五百名爾語繼言繼牟其文遠止請布隨爾斯久奈毛誌勢流乎　さて千名五百名語り繼ぐべき文を書てとこしへは名の方薄くなり文の方重くなり、文の力にて其仐名の後世に傳へたきやうに聞て建部翁の德よりは、鈴木か高名なる文によりて其名傳はるやうにあらずやよく考へ給へ、君父の名さへ省略する短文に書籍の序の如く、乞はれ由なとす末文かく云はなとも字數はなきやうにあらまほし、願くは其子其弟子等の代作にて其文者の名なきも愈佳ならんか、又他人撰ばんならば其師友君などの中にてあらまほし、元來其文の德其師の功は自ら誇らで人に賞せよ、美めてたべと願ふものにあらず師父の德を追慕して、子弟等其心に思ふ限りを靈に對して書くは仔細なし、知らぬ人に其功德を知らせて褒めさせては往年自ら食ひし美味を、不食人に語りて其味の德を賞させるが如し、然れども其文を乞ふ人は自ら堪へぬ處ありて不文筆の人、文者に書簡乞て書かするが如くなれば文者よく其意を取りて其人の心をよく寫すが妙文と言也、今此文は手紙書乍ら其悲しき人よりも自分悲しく其人の德よりも自分の德ありて、名の言ひつくすべき文を書てたべと賴まれしゆへ書たりなど、意趣も文體も立ぬやうに思はれて我は尊ともおもほえず、往年出羽邊の大名國替を官より命ぜられけるに、其全部の百姓別離の悲歎に堪へず入國より恩遇の厚き事を草かな交りに書き、此府中に出て官に歎訴せんと我に謀りける文等を見るに、その文愚なれどもその丹歎義烈眞に迫りてたゞ落涙に及ぶ計り中に一字も改る事なし、このまゝ訴へよと云へども兎角文の拙劣なる事を自耻て公事宿と云に至り、彼等に乞て書かするに文やゝ章をなすに似たれども原の丹情義心の懇に切々たる處を失ひ、更に更に徐情感應する處なく只一片の口上書となれり、こゝに於て余其誠と不誠と天地を動かし鬼神を感ぜしむるとせざるとを能徵議せり、今此文恐くは其意に類せんか然らば甚不禮畏怖至即君は彼民也、文者は公事宿也君に誠あれども撰是を述ふる事能はず、而して撰者の文ある能も君の誠ある德も皆死物となれり、全く君皇朝の古學をし玉はぬ故賴みしなれば君の惡しきにはあらず、鈴木の至らぬなり、失言多罪々々

大瀧君　　方定

玄齋はこの次に自己の意見を言ふよりは批判的な短評を載せて居る曰く

「山比子の碑の事方定の論ずる處最乍ら既往はとがむべからず、方定のみならず人々色々難ずる事なり、方定も倭漢の才秀でたる故兩雄幷立ず此爭生じつらむ。」と、また

「天眞と川北の南橘と詩の爭論ありて予に截斷せよと日に申越したれど辞なし」。

と傍觀的態度に出て居るやうであるけれども、內心穩でなかつた事は其口吻によつて知られる、この論爭は山比子死後數年後の事である、重胤の莊內に初めて足跡を印したのは天保十四年である、山比子の碑の建つたのは弘化二年春だから、撰文は恐らく天保十五年改元。弘化元年であらう玄齋も當時の重胤を白面の書生視し其歌其書跡等も散々罵倒して居る、方定に關しては弘采錄及病間雜抄に數次其名が見え玄齋は鼠ヶ關迄も出掛けて會見したらしい、方定は醫を業として諸國を巡遊し山比子とは面識あり、春來帖の序文を平野比黛美に依頼してやつたのは彼であつた、今詳數其行狀は知り難きも弘采錄に重胤に與ふる書を載せ其中に「帥は予と叔姪の間にあり」と言ふ語がある、重胤、平田篤胤歿後なりしも其學風を敬慕して遙々秋田に師弟の禮を採るべく下向し素志を果して莊內に留まつたのである方定の數次莊內を通過したのも平田篤胤に關係あつたものとも推察される、重胤學問進みて後、師說を疑ひ更に祖師截るに至りて篤胤の門下との激しい軋轢を生じたのである

この碑文問題などもその一つの現れかも知れない。

以上の問題は當時一つの話題を識者間にもたらしたものと考へられる、しかし今日から見れば兒戲に等しい感情の遊戲に過ぎないやうなもの、、山比子の寺小屋の師匠としての德風の感化の偉大さを拾ふことが出來るのは砂金を拾ふ樣な貴重さである、山比子の平素に就いて知り得るものは殆どないが、大瀧惠迪、佐藤行道、今野收助などの「傑れた師匠思ひを出した事は社會教育者としての成功と貫錄を示して餘りあるものである」。

現在建部家には參考となるものは殆どないと言つて居た、が山比子は手習子供に對しては頗る嚴格で生徒は頗る眞面目に勉强をしたと言ふことだけが語り傳へられて居る、鶴岡市の莊內史料編纂會所藏本に假りに「手習處控書」と命名したものがあり山比子莊時の筆蹟と推定されるものであるから參考に誌しておく

覺

一、手習傍輩は兄弟同然に候間睦敦致不知事は相樂に教可申候鬪爭口論等は心安立過無禮に致し候より事起候間禮義正敦可仕候勿論他の手習子供と一切口論等不仕樣可致候惣て大抵の事は不請致可申候

一、途中にて貴人は不及申年輩候人に逢候節は統冠物丁寧に辭儀いたし可申候勿論對當番別而無禮不仕樣丁寧挨拶可仕候

一、火の用心別て大切可仕候
一、揚に書物讀候節能字指いたし中音に讀可申候
一、戸障子は下に居靜に○閉可仕候　（○は虫喰ひ不明）
一、朝飯後參候節我机の○○○○の机有之候者其者の居場へ並置可申候
一、朝飯後參候より揚候迄無言に候若無言に不改者は過怠に候雖爲當番無用の咄仕間敷候
一、口論等改候者は双方に嚴重過怠可申候無理成もの有之候はゞ一往靜に譯を聞かせ其上
　にも聞入不申候者は當番へ可申出候其節相糺過怠可申付候
一、掃番の者隅々迄よく奇麗に掃除可仕候若亀末仕候者は翌日掃番勤可申候
一、諸事願の筋有之候者當番へ申出べく候歸りの節途中靜に可致候
　右の趣堅く相守べし此上にも不用者は机爲背負相返可申候間何れも能合點致心得違無之
　様致すべき事。

以上のやうな教育指導によつて惠迪の如く師に對して徹頭徹尾其恩に感じて報本の志を變へなかつた人の出たことは感化力の深かつた爲である、惠迪は川北の代官の手代を勤めたその以外知る處がない、歌は詠んだものか詠まないものかを疑問にして居たが、玄齋六十初度の賀筵の時に其歌を知友に徵した遞炫集を見ると。

　手ををりて千代を今より數ふれば君が齡の長くもあるかな

の一首を發見した、佐藤行道に就いては別に一冊に纒めて見たいと考へて居る、以上綜合して觀察する時は山比子は歌人とよぶより教育家であり、當時教育の主潮をなして居る書家であつたと言つてもよい、山比子の書いたものは巷間可なり見えるやうであるが、歌の外文章等は見當らない、平素酒をたしなんだ事は玄齋の記事にも見え白井固のかくも草にも載つて居る、平素の趣味として琴を弄んだ事は予所藏の書翰に

　箏絃悉氣の爲に二筋迄切れ候て彈兒度候へ共難叶候間憚千萬奉存候へ共何とぞ今明の內に御出御しめ直し被下度奉希候律竹御持參調子も御合せ可被下様奉願候御出の儀は今日か明日か被仰下度候以上

　今夕御光駕可被下においては彌大慶なり（三月廿二日）　山比子

　將監　様　要用

將監は辻氏、天神町伊勢兩宮の社司で親交あつたと思はれる、何年の時か不明なるも箏は

初歩程度であつたらしい。

建部家の系譜を拜見さして戴いた

天譽正皎澄圓居士　建部彌左衛門　天和二戌年二月二十二日

心譽榮運乘蓮大姉　建部彌次右衛門妻　元祿十六年五月二十三日

は最も古く酒井家と共に莊内に移つたものでなく土着の鄕士か何かであつたらしい、菩提寺である極樂寺境内にある山比子の墓は自然石にて正面に

仁達勇道儀山居士　側面に天保十年五月三日　建部重太郎

とあり裏には山比子の筆になる

露ながら衣はそめす萩の花ぬれたる色ぞこやまさりける

歌を刻してある、惠迪等の計劃した石碑は計劃にくひ違が出來て、二つとも内容を變へたものとなつた譯である、山比子には前の妻の戒名はなく

道譽妙善眞行大姉　建部重太郎後妻　安政二年二月廿二日歿

とあるから後妻は山比子におくれる事十六年のやもめ暮しをした事になる、其父母

廓譽然悟得忍居士　享和四年二月二日　治右衛門

心譽妙月清潔大姉　文政八年六月二十八日　仝　人　妻

となつて居る、山比子の生れたのは天保十年六十二歳より逆算して安永六年に當る、父は二十七歳の時母は四十八歳の時に歿した、祖父は新五と稱し寛政三年に歿したから山比子十五歳の時である

○

山比子歌集は玄々堂齋藤治兵衛翁の所藏本を拜借した、この本は佐藤藏書印あり卷末に此主田林友睦の印あり、筆蹟頗る美事である、春夏秋冬、戀、雜、哀傷、に分類し、春、四十四首、夏、三十一首、秋、五十首、冬、三十首、戀、三十七首、雜、十二首、哀傷、二十一首都合二百二十五首を收めてある、これを原本として西田川郡東鄕村二口佐藤東藏氏所藏本と校合した、佐藤氏本は若干歌數は多いが玄々堂本は定本として山比子自身撰んだものを寫したものかと思はれる、山比子は決して多作者ではなかつた、寡作にして心ゆくまで推敲したのは彼の性格の然らしめる所であらう、今この歌集によりて彼の精神生活に若干の考察を加へて見たい。

○

夏の歌、一本には人の拾ひおける女の子の人となりけるを見て、と題詞あり春來帖には
この歌思ふことありてよめるなりとありて

蒔きていにし親はいづこぞ撫子は花の盛りとなりにしものを

とあり、山比子天神町に住みていと困窮せしがある日の夜半、兒の泣き聲頻に聞ゆるまゝ出て見れば門前に幼兒を捨てゝあつた、自分自身の貧しさを忘れて憐憫の情に堪へずして育てた、山比子人にもやさしく同情心に富んだと道塗に傳へられる、按ずるに山比子早く妻帶したるも生活苦によりて離緣したが家庭の事情母方に於て育兒し能はざる結果による捨子ではなかつたかと思はれるが、どうか

娘、小松がいと〳〵幼かりける時母に離れてまたの年の秋、いとものの寂しかりける夕暮に前栽の薄を眺めつゝ徒然として居たりけるを、うちまもられ侍りて

心なき尾花が袖もうちしほれ我なでしこの露にぬれつゝ

穂に出て招くを見れば花すゝき思ふ人こそありげなりけれ

この二首の連作は前の事實と連絡がありそうに思はれる、母の乳房にすがりて育つべき子の、いとけなくして乳房を離れて甘ゆる人もなきあはれさを、目前に見てしみ〴〵と憐む

ものは母なき子にとつての父でなければならない、此小松の場合祖母と父の愛情は母一人の愛情には及ぶべくもない。ぼんやり前栽の薄の風に動くを見いつて入る娘をつく〴〵眺め入つて、この子の母が居たならば乳房をふくまして嬉々として居ようものをと、感受性に富んだ彼は哀愁限りなく愛憐の情に思はず涙をしぼつたのである、悄然として幼兒に見入つて居る父としての彼の姿が髣髴とする。穂に出て尾花は招けども其子の母は歸つて來ない。

山比子の一家は玄齋記述の如く、いたく窮して籠女の惠みを受けなければならない程の境遇であつたから、新婚の樂しさなどに夢を抱く幸福はなかつたであらう、かくして精神的打擊と生活苦と戰つて掌中の珠と育てた娘も遂に奪はるゝ運命となつた

娘小松のうせける時彼の鏡を

片身とて見れば嘆きの增鏡影だになどて止めざりけむ

弔ひに集つた人々も歸りて立ち去れば、家中は急に寂しくなる、娘のありし日朝夕塵を拂つて姿をうつした鏡は、男やもめのがらんとした家にはひときは目に立つて思出の種となつた、十六になる迄も育てた娘をなくした事は精神的に大きな打擊である、今の娘達の十六

といへば女學校の二年か三年の年頃であるが、早婚な昔にありては花の盛りで結婚適齢期となつたのであるから嘆きも深い譯である。影だになどてとゞめざりけむと嘆息するあはれさには充分同情される、

人のおもひにうもれるが許に
冥土には人通はさぬ關もがな行て歸りしためしなければ

と言ふ歌にも同情出來る又

時雨降りける頃娘の事を思ひ出て彼是取りて見けるに昔の手して書きける歌どもの中に窓打雨といふ事ありければ

降るたびに時雨や床にもりつらむ片敷く袖の濡れぬ夜ぞなき

私の床の斯くいつも寢る度に冷く心細いのは時雨の降るたびに濡れるためであらうと嘆いた、彼の徴祿は將來性なく幸福と言ふものに見放されたので彼の溜息も深刻である、子は一家のかすがいと言はれ、厄介ではあるが、いつも春風の如きなごやかさを漂はすのものである、老後を樂しみ一家もこれによつて慰めとなつたのであるから唯一の希望を失つた譯である

しるしにたてたる石ぶみに書きつけける歌

定まれる千代をば經なで姫小松名もいたづらになりにけるかも

私は極樂寺建部家の墓の畔を山比子の娘が爲に書いたといふ、石ふみをさがしたけれども見當らなかつた、千代を經よとてつけた名もあだとなつた、時の流れに消えてゆく感情をあはれに思ふと共に、日に月に消失して行く出來事を葬つた疊々たる墓所を眺めて感慨にふけつた事である。

母君の思ひに籠りける時、古、娘小松がいとけなき頃女にとく別れて後母君と我が中に居て育みたてゝやう〳〵人となりけるを、十六といふ年の秋ばかり亡くなりにけり、それより七とせと言ふ年に當りける年の夏、させる事もなくにはかに隱れさせ給ひければ、いと〳〵悲しくて昔娘の小松が生ける時三人ありける時の事どもを思ふに我身のみ殘りければ限りもなく悲しくて生ける甲斐なく思ひければ

諸共に同じ道へは行きやらで親にも子にもおくれけるかな

山比子の母を失つたのは四十八歳の時である娘は其七年前だから四十一歳に當る小松の

母を離れてから二十三年目になる、此間再び後妻を持たずに母子して暮した事になる、彼には少しも社會組織を呪つたり肉親を恨んだりした所はない、宿命觀に安んじて觀念して居る、女子にして子を抱いて貞節な生活に入るものは見受けるが、山比子の如く貧に處して居たとは言へ、この境遇にして書道に精進し歌に精進して怠らない者は稀である、大瀧惠迪の元所藏にかゝる歌誌帖によれば四十四歳書とある、其風一變して義之の風格となつて居る、不遇なる中にありて彼の如く高尚を志して志を變へない確固な信念あつてこそ、教育家としても強い感化力があつたのであらう、山比子は後妻を娶ることによつて母への孝道に缺くるものあるを考へた事であらう、我等は大なる苦難に直面してこそ試練となるこれを越えて初めて光るのである、山比子も難關突破によつて書跡に歌に思慕の結晶が石碑に殘つたのである、薄命でなければ人間には眞の力眞の聲が出ないのかも知れない、寂しい事ではあるが、天地の間に身よりもない孤獨を味ふあはれさに同情の涙をそゝぐと共に、人生の皮肉さがまづ思はれるのである。

山比子の後妻を娶つたのは何歳か詳にしないが後妻は畑作と名づけた一男と女一人を生み男は家を繼き、女某は飽海郡觀音寺邊に嫁した模樣である。

莊内の國學者白井固と山比子とは身分の相違はあつた、しかし同じ道を樂しんで居たので互に往復はして居たらしい、固の歌集かくも草に

人のたゞ一人もたりし娘の身まかりける時なでしこの花につけて遣しける時に

神奈月のつごもり

霜かれし草にまじれる撫子の花だにかくてあればある世に

とあり、山比子は中風に倒れた其年月もよくは知られないが最初は輕微であつたらしく

病をして少しおちたりける時溫の湯あみしにゆきけるを又おこりてたのもしげなく思はれて

死ぬる命生きもやするとはかなくてうつせみの世をたのみけるかな

と歌はしめなければならなかつた、死ぬるべき命であるが若しも萬一にも生きもやするかと現世をたのみとして湯あみに來たことであるがそれさへ頼りのないことであるの意、人生の落寞限りなきことを思はするに餘りある、此時の事がまたいつの年であるか明瞭でないが固の歌集、かくも草の中に時を同じうして溫海に入浴したことのあつたよしをのせてゐる。

温海と言ふ里に湯あみにまかりけるに本之も同じく里にありと聞けど音信だにせで日數經にければ九月の十餘日よみてつかはしける。

此里に住むとは聞けど山高み木かくれて見へぬ月かも

木かくれては寫本のまゝたと文字が足りないやうだ多分木かくれにしての書寫の誤かと思はれる、また、この返し何んとか今忘れたり十三日同じ人のがりつかはしける

おなじくはあはれ知れらむ、人ことに今宵み山の月をみてしか

あるじもうけするに夕つ方俄に時雨うちしきりて暮れければ月よき夜にこそと言ひおこせし返しに

まつ人の光も月もいたづらに時雨にへだつよはの佗しき

またの日、月いと赤くて山の端を出るほどに本之もうで來ぬ打ち向ひ居て酒たうべつゝいと多かりけれど醉のまぎれに得かきとゞめざりける、本之明日は家に歸りなむに夜もいたく更けぬ。したゝめわざもあなるとてまかでんとするに

かく計り澄める深山の月かげを捨てゝ浮世に何歸るらむ

返しありけれど又忘れたるぞわろきや、又しばし汲み交す程に時うつりたりとて急ぎ立つ

とゞめてもとまらぬ人は山里の月と紅葉に今はまかせつ

この返しとてつとめておこせたる

飽かずしてわかれし影の戀しきに心は月にとゞめてぞゆく

また

わかれても心し月にとゞめては宵々ごとの月とこそ見め

と言ひけれども早やいにて及ばず

と載せて居る、當時の山比子の病狀は酒をのむ程であつたから頗る輕微であつたと思はれる。

溫海岳といふ山の麓なる比良清水と言ふ處の泉のほとりにて涼みける時

夏かけて消えぬ氷もあらなくに冬よりさむき山の井の水

比良清水は溫海の奥老杉數株亭々として天を摩し、其根本より清泉こんこんとして湧き出て昔を語るが如くである、蕎麥の名所である此歌石に彫りつけて水のむ人らに濡らされて大きい自然石に雄渾な筆の跡を殘して居る、莊内に歌碑多しと雖も斯く堂々たるものはない、かくも草に

建部本之が卯月に三山に遊べるつとに盛なる櫻の枝に歌つけておこせるかへし

心ある人を待つとてみ山べの櫻は春に知くれけらしも

山比子歌集に三山の歌一首も載つてない。

肱折と言ふ處の湯に行ける時角川といふ處の山中にて雨にあひて木かげにしばし休らひける間に頻りに時鳥のなきければ

村雨にぬればぬるとも時鳥聲だに聞かば何かいとはむ

この行も病氣保養のためであつたと思はれる、最上川を舟で上つて行つたものか、板敷山を越えたものか不明である、山比子は叙情の歌多く叙景の歌は至つて稀である、彼の歌は自己中心にして其以外に出ぬ、從つて時代の思潮には極めて關心は薄い、當時の日本の歌壇は加茂眞淵は彼の出生に先だつ十年前に歿し、本居宣長小澤魯庵は其少年時に歿し、香川景樹等と時を同じうし橘守部などの盛に活動して居る、所謂歌壇の復興期なのであるそうした時代にあつても其影響は受けないと言つても良い、以下春の歌より順次一首一首を見てゆき度い

○

暮れ殘る年にと知らに來る春は霞むをまたぬものにぞありける

年の内に有りけるものを春霞冬をこめても立にけるかも

詞書　年の内に春立ける日よめる○新勅撰集に年の内に立つ春といへる心を云々、古今集にふる年に春立ちける日よめると同じ意で、年内立春の日に興じて詠んだものである、此二首は新味があるといふ譯ではないが古人の歌を熟讀玩味して其盛られた内容を咀嚼して自己を出して居る特色がある。

年にありて春ぞ樂しきもの毎に世になり出る始と思へば

詞書　春の始の歌、やゝ低調である、北國の長い冬の生活から春になり行く氣分は樂しきの一語につきる。

思ふどちつどへる限り異ならで春の初に逢て樂しき

詞書　春初の宴に○新年宴會に集つた連中は去年と同じ顔て、無事で新年を迎へた事は目出度く樂しい事だの意で作者の人のよさと老成した晩年を示して居る。

春毎の子の日にもれし松なれば野邊にたてりて老ぞしにける

詞書　子の日によめる○立てりてはやゝ無理な語法ともいへやう、勿論當地方に於てはさ

る行事はなく、若い者はどん〳〵立身し自分はいつまで立つてもその望みなく、老骨となつたことを嘆くのであらう。

春かけてなほ古年の殘れども冬はとまらぬ心地こそすれ

詞書　む月まで冬のかゝれる年の春いと長閑なりければ○此歌春來帖には十日あまり冬のかゝれる春とあり、む月は正月のこと、日ざしの長閑けさに冬は完全に遠のいた心地がするの意、今の短歌作者は陳腐なものとして顧みないてあらう、古人は季節に重い觀念を持つて居た、拾遺集に、春立ちてあしたの原の雪みればまたふる年の心地こそすれ、とあり參考になる。

鶯の尾羽うちふれて木づたへば雪の內にも花ぞ散りける

詞書　雪の內に鶯をよめる○かうした歌は古今集、拾遺集にある類型歌に影響されたもので實感とは凡そ遠いものである。

春されば花とか思ふ鶯の雪ふる木々の枝うつりして

この歌も實感を主としたものでなく、傳統的和歌の思想的觀念で詠んだものである、古來實に多くの歌人によつて詠まれた題詠である。

白妙に河邊にさける梅の花枝にかゝれる波かとぞ思ふ

詞書　水の邊りに咲ける梅の花を○白妙の梅の花は玉葉集にも見えるけれども仰山に聞え技巧的でありまた類型的である、古今集に同じ題にて、春毎に流るゝ水を花と見て折られぬ水に袖やぬれなむ、の反對を行つた表現である、巧みではあるが把握力に乏しい、拾遺集に同じ題にて、末結ぶ人の手さへや匂ふらむ梅の下ゆく水の流に、なども同巧にして異曲である。

うつろはむ果てをば知らず梅の花匂ふ色香のあかずもあるかな

詞書　紅梅のいと面白くさけりけるをよめる○うつろひ果てた後は知らぬ事現在いま匂ふ色香の飽かず眺めらるゝ事よの意、梅は萬葉集末期から多く詠まれた題材で凡そ陳腐になり易い傾向を持つて居る、この歌は上句の深い梅の花に對する同情ある表現によつて救はれて居る、古歌集の壘を摩して充分認められる佳作である。

色も香も桂と共に久方の中に匂へる花かとぞ見る

詞書　梅の花の盛りに月のいと面白ふ花の影よりさし出でたりけるを詠みて○桂と共には月の光と共に或は月と共と言ふ意であらうが、正しくは月の桂と言ふべきである、詞書で

補つて居るといへば言へるとしても、それは兎にも角にも今の我等には緣遠い境地ではある、が一幅の繪畫を見るやうな洗練され整つたものとなつて居る。

木のもとはそことも見えで春の夜の霞める月に梅が香ぞする　新葉集

霞む夜の月の桂も木の間より光を花とうつろひにけり　新拾遺集

梅が香も天きる月にまがへつゝそれとも見えず霞む頃かな　新勅撰集

等の歌に比して味つても矢張りいゝ作である。

詞書　梅の花の散るを詠める、三首○下句重苦しく窮して居る、語法も無理がある、一首

雪とのみ散りかゝれども梅の花かざす袖さへさえすぞありける

は雪のやうにふりかゝつてもかざす袖にも寒さは膚に鋭く感じないの意

梅の花散る木の下に立寄れば袖さむからぬ雪ぞ降りける

神經過敏から神經衰弱にかゝつて居るやうな、今の時代から見ると如何にも伸び伸びとしてゐる、歌のよい惡いと言ふよりそれに滿足して居た時代の人々の心が思はれる

梅が香も散れば失せぬるものなれど飽かぬ心ぞなほとまりける

古今集に、ちると見てあるべきものを梅の花うたて匂の袖にとまれる、とありこれらの歌から影響をうけて居よう。しかし充分の工夫はして居るからあぶなげはない。

春さらに雪は降りつゝ消えずともなどか好まん花ならなくに

詞書　春の雪の降りけるを○ならなくにのなくはぬの延言、ないのにの意、新古今集に雪落衣といふ事を詠み侍りけるとありて、梅ちらす風もこえてや吹うらむかほれる雪の袖にみだれて、の裏を行つたものであるが埋攻めになつてゆとりがない。

かへるとて雪路をわけてなく雁は天つ空なる人や戀しき

詞書　歸る雁をよめる、四首○天つ空なる人や戀しきは遠方に居る人を戀しく思ふて啼くらしいの意で人は雁の知り合ひといふ位の意である、下句の据えさまやゝ適切をかくやうである、立入つて言ふならば山比子は自分自身と自問自答してゐるのかも知れない、古今集に夕暮は雲のはたてにものぞ思ふ天つ空なる人を戀ふとて、とあり。

花さかぬとこ世にかへる雁がねもこの春ばかり過してをゆけ

とこ世は常に變らぬ處の意、空想を帶びた言葉づかひの成語である、花もさかぬ常に變らぬ國にかへる雁よ、ふだんはどうあらうと、此春ばかりは花を見て過してゆけと呼びかけたのである、續千載集に、雪とふる花を越路の空と見てしばしはとまれ春のかりがね、な

どの暗示があるかも知れぬ。

春きぬと越路へ急ぐ雁なれば花に心もとまらざるらむ

この歌も古歌に沒頭して現實を離れた歌である、京都に居ては春の歌になるにしても、莊內に居て越路にかへるは秋の歌にならねばならぬのだ、千載集に、天つ空一つに見ゆる越の海の、とか前出の花を越路の空と見てとか、金葉集に今はとて越路にかへる雁がねは羽もたゆくやゆきかゝるらむ、其他にも多い、今日でもうつかりするとかうした失敗がある。

かりがねはいつしか花に住みなれて歸る春をばよそにするらむ

前の歌と趣向を變へて詠んだのである。

歸るべき春をたがへず行く雁も花にや旅の日數へぬらむ

詞書　彌生の末つ方雁の來るを○雁を有情化し人格化して詠んで居る、一筋に歸り來る途中花に足どめされて日數を經たのであらうの意、後拾遺集に、ゆきかへる旅に年ふる雁がねはいくその春をよそに見るらむ、とあり、今の人から見れば迂遠のやうだが、雁の盛んに群れて春秋に往來した時代の反映は、當時を知つて居るものにはなつかしいものである。

春の色の至らぬ野邊もなければや同じ緣に草はもゆらむ

詞書　若草をよめる○此作者どしては比較的巧まぬ詠みぶりであり整つて居る、續千載集に、野も山も同じ緣に染めてけり霞より降る木の芽春雨、とあり參考になる、春の色は春の日のといふ程の表現であらうけれども色と言はなければすまされない彼の性格であつた。

もの思ふわれとはなしに春の夜の朧月夜ぞはれがてにする

詞書　おぼろ月をよめる○われとはなしにわれとなく、自分といふのではなしに、おぼろ月は新古今集に、文集嘉陵春秋の詩に、不明不晴朧々月といへる事を詠み侍りける、照りもせず曇りもはてぬ春の夜の朧月夜に如くものぞなき、は有名である、凡平安朝以來の題材らしい、結句がなまぬるいので頭にぴんと來ない、今一息といふ感じである。

明日知らぬ我身をおきて櫻花夜の間の風のいとはるゝかな

詞書　世の中のはかなき事をうちなげける頃櫻の花のいと面白かりけるを見てよめる○明日をも計り知り難い自分はさておいて、櫻は散り易い花であるから、せめて花にだけは夜風に當らせ度くないものであるの意、此の作者には煩悶がをかつた、貧しさとたたかひで愛慾の情と戰つた、無情の花に情を寄せてあらゆる艱難を戰ひ克服したのはこの心があつたからである、古今集に紀友則が身まかりける時、明日知らぬ我身ともへど暮れぬまの今日は

人こそ悲しかりけれ、とあり、深く身にこたへたある感傷の浸潤を思はせるものがある。

我宿に咲くも櫻と思へども花と見ねばや見にも來ざらむ

詞書　家の櫻の花ざかりに見に來る人もなきを○ばや、やは感嘆の助詞、自分の貧しい庭に咲いても櫻の花には變りのない筈だが、見に來る人のないのは花とは思つて居ないのであらうの意、櫻の花の盛りは氣分も浮き立つ、一瓢を携へた友の欲しい樣な空氣の漂ふ季節である、暗に不遇を心のどこかに感じて、その寂しさを托したのであらう。

世の中はとてもかくても長らへて花の盛りにあふが樂しき

詞書　櫻のもとにて花の宴しける時○平生寂しい生活をして居ると種々の妄想が湧く、櫻の爛漫とさいた花の下に氣の合つた同志と會して、宴を催して歡を盡すことは誠に樂しい極みである、月並な平凡な歌ではあるがそれでよい、我等凡人の長い生涯には倦怠を感ずる事、實に多くこの空虛を滿たすには花の宴も必要なのである。

櫻花心にかなふものならば千代も散らさで見てましものを

詞書　櫻の花をよめる、四首○心にかなふ、心の思ふまゝにの意、櫻の花を見て甘へてゐる彼の善良さを思はせる歌である。

櫻ばな咲かぬ年とはあらねども飽くまで見つる春もなきかな

歌意明瞭、たゞごと歌のやうではあるか、春愁を感じてゐる彼の北國人らしい感情には同感出來る。

年かぎり櫻なちりそ花すらも今はと見ゆる果のうければ

年かぎり、一年中、なちりそ、ちるなかれ、清楚な花を鑑賞して幾日もおかず、風雨に打たれて地に委するは見るに忍びないと言ふ意である。

昔より變らぬ花の色みれば同じ心に飽かずぞありける

昔より、物心ついてからといふほどの意である、毎年咲く花ではあるが毎年同じ氣持で飽くことのない花であるの意。

見る人もなき我家の庭櫻花のなげかん事ぞくるしき

詞書　庭の櫻を見て○この歌は前出の我家にさくも櫻と思へどもと同巧異曲である、自己の孤獨と其寂寥を櫻に托してゐる、彼の深刻なる憂愁は分つ人もなく、花に對し月に向つてその憂さつらさを晴さなければならなかつた。

大方に散るをば見まし櫻花春なき年もあらずと思へば

詞書　櫻の花の散りけるを、二首○まし、假定し想像する意、からんだ詠みぶりではあるが作者は落花に對していかにもあはれ深く感じてゐる。

櫻花あらぬ色香にほだされて今年もこりずなげきするかな

あらぬ色香、意外な色香、ほだされて、感情が引ずられて行くと言ふほどの意、落花に對して感じた情緒をふり返つて反省して詠んだ歌である、歌は理におちてよいものではないと思ふが、作者の人なつつこい寂しい氣持には同感出來る。

春ふかみ池の汀はぬるめども浮べる雪は消えがてにする

詞書　池のほとりに櫻の散りぬるを、三首○池のみぎは、汀は水ぎはの意で、汀の水は、と言ふほどの氣持であらう、此散る花を雪と見立てた事は拾遺集に亭子院歌合に、櫻ちる木の下風は寒からで空に知られぬ雪ぞ降りける、仝集足曳の山路にちれる櫻花消えせぬ春の雪かとぞ見る、などとありて全くの題詠で古人の觀察上の通念であつた。

櫻花ちりぬる池の汀には水にも消えぬ雪ぞ降りける

前出の歌と同巧で平凡。

雪とちる櫻は消えずありぬともなどかたのまん花ならなくに

櫻の花は池の面に盛にちりうけて春のあはれさをそゝる、もう二度と梢に返る花ではない、梢に返り咲くことを希求してもむだな事である、花ならなくに、は散つたものは花とは言はれない、位の意。

櫻花散りての後の古郷ほひとも梢に春風ぞふく

詞書　古く住みけるところにて櫻の花のちりはてたるを○古く住んだ處は不明である、山比子は一二度ならず引越して歩いたやうである、御給人級は今日でいふ官舎住ひではなかつたと思はれるから、貧しきが故の引越しであつた場合も想像される、その邊の事はしかとわからぬ、十分であれば其家の人數其他の事情で家の住替を强制された、故郷は古く住んだ家をさして言つたのである、少年時代などを過して深いなつかしみを覺えて詠んだものと思ふ、貧しきものは惡い家から良い家に引越すなどと言ふ事はない筈だから感慨深い譯である、いろ〳〵思ひ出も湧く筈である、晩春のなやましさもある。

山風はいたくな吹きそ花見れば散らぬさきより靜心なし

詞書　花のさかりに風のいたう吹きければ○此歌には僅かながら地方色が出て居る、我が庄内地方の花ざかりには實によく風がふく、梢をふきしなふ風をみて居ると靜心がない、

只此場合散らぬ先よりといふ表現は困る。

花見れどかつ惜まるゝ心かな散るてふことに物忘れせで

詞書　花のさかりに○かつ惜まるゝとか、物忘れせでとかいふ前人の成句として考へても花のさかりのうつくしさに對しあゝこの花も散つてしまうのかと、惜春の情を人生にまで浸潤さして居る山比子の心持がわかる。表現の古さは歌位を低下さしては居るが。

青柳のよりげになびく糸みれば人の心ぞ疑はれける

詞書　柳のもとに女たてり○柳に女は畫題にもよくある手で、なまめかしい題材である、從つて歌にも多く詠まれた、拾遺集に、近くてぞ色もまされる青柳の糸はよりてぞ見るべかりける、また、秋萩を彩る風は吹きぬれば人の心ぞ疑はれけり、などより影響されたであらうが、巧みであるといふべきであらう。

青柳の糸はよりげに見ゆれどもつなげる駒は離れだにせず

詞書　柳のもとに春駒をつなげる繪に○この歌は大山町椙尾社々司宮野氏先代所藏の書畫帖に、天保義民で其名を知られた文隣和尚の畫に賛したのを見た事がある、果してその賛に詠んだものかどうかは知らぬ、今飽海郡松嶺在の某氏所藏となつた、柳は萬葉には女のまよ

びきを聯想して居り、詞花集に、眞菰草つのぐみ渡る澤邊にはつながぬ駒もはなれざりけり、とありて參考になる。

うつゝにて行く年月のなければや夢の間にして春のくるらむ

詞書　春のとく過ぎぬるを○表現法に足りないものがある、行くと言つて更にくるは、來るとくるゝの意と混同し易い、これは作者が青春期を過してからの歌である、古今集に同じ題にて、梓弓春だちしより年月はいるが如くにおもほゆるかな、とあり。

ゆく春も花の盛りは殘せどもさすがに惜しき今日のくれかな

詞書　三月晦日に○此地方は四月末頃に櫻の花は盛りになる、花の盛りは翌日に越すこともある、舊暦ではその年によつて開きがある、陽暦の四月は大體舊暦の三月である、古今集にも彌生のつごもりを歌つた歌を見うける、古人の季節に關する觀念は今の人とは密度が違ふ、現代人は春のあはたゞしさを味ふひまもない。

花はみなうつろひはてゝいたづらに今一月の春ぞ殘れる

詞書　彌生にうるふ月のありけるとしに○閏は太陽が地球を一周する時日と、月の一周する時日との相違から起る朔望の合はないものを整へるために、五年に二回十九年七回と日

數を多くしてその過不足なきに至るものである、拾遺集に、閏二月侍りけるつごもりとして、常よりはのどかなりつる春なれど今日のくるゝに飽かずぞありける、の反對を行つたものである。

以上で見ると春の歌四十四首の中櫻の歌十五首を占めて居る、櫻は日本人として最も愛好されたものだが、そんな思想的によりも性格的に彼は好んだと見るべきである、最も古今集業平などは世の中にだえて櫻のなかりせば春の心はどけからまじと歌つた程であるから其影響もあらう。

○

夏かけて咲まつはれる藤の花うべこそ春をとゞめざりけれ

詞書　藤の花をよめる○後拾遺集以下藤は花の部としてあるが、此地方は五月末六月初にかけて、子規の啼くのと一致するから、夏かけてといふのも穩當なのであらう、萬葉集に赤人は植ゑし藤波今日さきにけりといひ、越中國守家持は多胡の水海に遊んで多くの藤の花の歌を詠んだ、春に咲く限りの花は咲き散り、霞は晴れ、入梅はあつてもさみどりの空にさはやかな風吹き渡る季節に咲く花は、藤の花である。

紫の色のみ深き藤なればそこの緑も見えずぞありける

詞書　水のほとりにて○藤は獨立の出來ない纏繞性植物だから木といふ樹を撰ばず纏ひつく、此の場合は濶葉樹であらう、水に映れるは藤の花ばかりに見え、からんだ木の緑はうつゝて居ないといふのである、後撰集に藤の花が遣水のほとりに咲いて居たといふ題で、棹させど深さも知らぬ藤なれば色をば人もしらずとぞ思ふ、とあり、緑も見えないといふ表現に新鮮味がある。

山がつの垣根に咲ける卯の花は木がくれ殘る雪かとぞ見る

詞書　山里にて卯の花をみて○山がつ、山賤とかき、木切などを職業として暮して居る人々の事を言ふのだが、一句の下に、住む家のを入れて味ふとよい、卯の花も歌には萬葉集以來詠み古された、それだけ季節の花として多くの人目にふれた花である、私の家の垣根も少年時代は卯の木であつた、今は見ることも出來ない程になつた、古人としては常識的な歌で、卯の花の白さを殘雪と見たてたのである。

一聲もきかであかしつ子規なかでやありしわれやいをねじ

詞書　子規をまつに聞えざりければ○此趣向も古いものである、抹消すべき歌である、山

比子の惡い處だけを見せて居る、あかしつといへばいをねじとくり返す要はなく、一首の中にやを二ケ所にするなどは騷々しい限りだ後撰集に、ねぬ夜こそ數つもりぬれ子規聞くほどもなき一聲により、とありかうした事を風流と考へた時代である。

子規尋ねわびにき世の中にもらさぬ程の聲きかんとて

詞書　郭公を尋ぬといふ心を○郭公と子規と混同して居たかも知れぬ、四月初め子規に忍びねもらすと言ふことあり、枕草子に、忍びたる子規の遠空耳かと覺ゆるまで、たど〳〵しき聞きつけたらむ何心地かはせんとあり古今集は、五月來ばなきもたりなむ子規まだしきほどの聲をきかばやなど其外にも多い。

殘りなく絶えにしものを袖の香の花橘に何とまりけむ

詞書　花橘を見て昔の事を思ひ出て○古今集の、五月まつ花橘の香をかげば昔の人の袖の香ぞする、といふ歌の反對面を詠んだものである、自己の苦しい體驗の氣持を出して居る斷ち切つても切れないのは愛情の思ひ出であらう。

世の中にあるかひもなし子規山路にいらむ道しるべせよ

詞書　子規を聞きて○傳說に獨の望帝といふ王あり荆人某を宰相となしたるに己れの德の及ばざるを知りて位を禪り後、山に入りて子規となつたとあり、歌は抽象的に詠んで居るが彼れは實際かうした氣分になつたであらうことは他の一首に、山ふかく引こもらんの心ありけれど、志とげやらで思ひわびける頃、と詞書して

そむかれぬ我身の果てやいかならむとてもかくてもあなう世の中

とありてこれらを思ひ合すれば必ずしも、山路に入らんといふ希求は歌の上のみではなく、彼の心に深く秘められて居たのであつた、娘小松を失ひ世に希望を斷たれた頃の作と思はれる、世の中の煩雜な羈絆から脫れ、山中に入つて靜坐默居して、餘生を送りたいと念願したのであらう。彼には老いたる母あり、世を遁れると言つても、其生活の資にも事缺く樣であつたと思はれる、山比子と同年なる石井子龍は鶴岡郊外新山に幽澗亭を營み、世塵を避けて悠々自適した、即ち意に適へば畵筆を採つて樂しみ、山比子におくるゝ事四年にして歿した、山比子、子龍生前に於て直接の交渉があつた事は聞かない、けれども山比子は子龍の隱逸を羨望した事ではなからうか、山聳え道極まる處に立つて未だ悠々として白雲を見るの境地に入り得ない彼であつた。

しばしこそうき世の中に住みもせめはては深山に歸るべらなり

詞書　郭公の頻になき渡るを聞きて○歸るべらなり、歸るべきなりの意、今あゝして鳴いては居るが、やがて深山に歸つて行くべき鳥である、なく聲はしても親しみ難い處のある一沫の寂しさを感じて居る、後撰集の、數ならぬ我身山路の子規しげき山路に何かへるらむ、といふ歌意の反對を詠んで居る、憂き世の中の言は主觀的な表現である。

子規さよふけてのみなく聲は寢ぬ人の聞くものにぞありける

詞書　夜ふかくに子規を聞いて○この歌春來帖に夜な夜な子規を聞てとあり、さよふけてのみなくころは、必ずしも子規と限つた譯ではない、古今集に五月雨の空もとゞろに子規何うをしとて夜だになくらむ、などとあはせ味ふとよい、苦心した跡の見える歌である、孤閨に轉々反側して寢られぬ夜のさまも忍ばれる。

我が門はよそに過ぐとも子規今ひと度は聲だにもせよ

詞書　遙に子規のなきけるを○子規の玉章と言ふ事がある、かすかに遠く聞えるあの聲よもう一度聞かしてくれ、我が家の門を過ぎるならば引もとめようものを、後撰集にふたこゑと聞くとはなしに郭公夜ぶかくめをもさましつるかな、とあり。

さよ更けて妻戀ひ渡る子規ひとりある人はいかゞ聞くらん

詞書　湯あみしに、ある湯もとにいきて宿りける家に、近きほど男にわかれけりといふ女も來やどりける、夜更に子規のなきければよみて遣しける○妻戀ひ渡る、鳥類の盛に啼くのは生殖期であるが、この場合は主觀的にかく感じたのである、何處ともないが湯もとゝは温海の温泉であらう、山比子は二十四歳頃から廿四五年も男やもめで暮した、今日推察の限りではないが、初夏の候に妻と離別したものと考へられる、此場合知り合の人で同病相憐むの情より出でたるか、又粹な取計ひによつたものかを判じ難い、古今集に、秋萩の下葉色づく今よりや獨ある人のいねがてにする、内面的感情を力強く表現して居る点、伊勢物語、大和物語などの一部分を讀むやうな情緒であるが、山比子の柄ではない感じもある。

夏の夜はゝかなき程にあけぬとも空ゆく月よ雲がくれすな

詞書　夏の夜の月を見て、二首○雲がくれすなの、すなは語感としてはつまつてゐるが、大體すら〳〵と詠まれてゐる、併し對象にあまへ過ぎた感もないではない。古今集に、夏の夜はまだ宵ながらあけぬるを雲のいづくに月宿るらむ。

見るまゝに涼しさまさる月影は夏のみ空のほかよりやゆく

夏のみ空の云々は太陽のゆく空のあつさは、なか〳〵に凌ぎ難い、この月の涼しい夜風

とは別々なのであらう、同じ空とは思はれないの意、拾遺集に、詠むるに物思ふ事の慰むは月は浮世のほかよりやゆく、とあり。

夏虫のもえのみ渡る澤邊には木の下道も闇なかりけり

詞書　螢をよめる、二首○夏虫は螢の異稱、後撰集に包めども隠れぬものは夏虫の身より餘れる思ひなりけり、やゝ誇張に過ぎてゐて、澤邊の木の下闇も成句と思ふが適切な感じを與へない。

もの思ふ身になずらえて夜もすがらもゆる螢をあはれとぞ見る

なずらえて、準じてまたはひきくらべての意、難しくはない歌であるが魄力にかけてゐる。

くれてゆく夏を限りの思ひとやいとゞ螢の身をこがすらむ

詞書　夏の末つかた螢をよめる○秋風がたつても螢は居るには居るものゝ、夏までの虫と觀じて詠んだ歌である、かうした見方や表現方法はその時代には常識化して居た。

水底にもゆる鵜舟のかゞり火は波だに消えぬ思ひなりけり

詞書　鵜舟○波だに、波にだにとしないと無理のやうである、鵜舟は鵜を使つて鮎などを捕るのを言ふので大方夜にするのである、萬葉集に大伴家持は越中國守として、國内巡視の時に鵜舟をたてた事が見える、爾來多く歌に詠まれた、この一首仲々複雜な表現である。

夏ふかき野中の清水み草にてそれと見えねば汲む人もなし

詞書　夏草○この歌は後拾遺集に、おのづから野中の清水知る人も忘るばかりに繁る夏草、などより影響されたものであらう、實情實景に即しない歌である、苦清水かき拂はるゝ夏は來にけり、と神山魚貫は詠んで居る、さすがは百姓歌人だと思はせるが、本歌とりばかりして居るとかうした失敗がある。

ひじりめくなにこそたてれ蓮葉は戀路に生ふるものにやはあらぬ

詞書　はちす○やは、疑問或は反語に用らるゝがこの場合は反語である、源氏物語に、蓮葉を同じうてなと契りおきて露のわかるゝ今日ぞ悲しきとあり、歌意は清楚高潔の名は立つても、蓮葉は本當は戀路に生ふるものではないか、古今集にも、蓮葉のにごりにしまぬ心もて何かは露を玉と欺く

うちもとも見えぬ扇のいづこにか涼しき風をつくりこめけむ

詞書　扇○うちもとも、内も外も即ち裏も表もの意、この歌の本歌は賴基集の中に、うち

もとも見えぬ扇のほゞなきに涼しき風をいかでこめけむ、よりとつた旨を行道本に附記してある、頼基の歌は後新拾遺集に載つて居る歌である。

ゆきとまるものならませば吹く風のやどりは袖とかさましものを

詞書　夏の風○作者は現在吹かれて居る涼しい風に對してかく感じたのであらう。この涼しい風を袖に宿らしめて暑さと言ふものを知らずに、この夏を過したいものだと希つたのである。

夏ながらまだきに秋や龍田川渡らぬさきに袖ぞ涼しき

詞書　川邊の涼みといふ心○龍田川に秋の立つをかけて居る、歌意はまだ夏であり乍ら龍田川の邊りに佇んで居るともう秋らしい感觸を覺えることだ。

みそぎする川邊にしあれば吹きうつるいぶきのさ霧立つとこそ見れ

詞書　みそきしける時川邊に煙のたつを見て○みそぎ、水そそぎの略、河原に出て水を浴みて洗ひ清むる一種の秡、古代よりの行事で夕方にするものと見え、後撰集に六月秡しに河原にまかり出で、日の明きを見てよめるといふ歌あり、みそぎして心身清く神仙化し自分の吐く息がさ霧となつたのかと思はれると言ふたのである。

夏くれてゆく河の瀬の早ければ返らぬ水に秋風ぞふく

詞書　みそぎしける時○返らぬは夏のかへらぬ事と水のかへらぬ事とをかけて居る、みそぎは六月末日には行ふから季節の上からは夏はゆく、そして、初秋の風が吹き初める、素材が多過ぎる感じの歌。

なく蟬の聲の時雨と聞ゆるは秋の境に入ればなるべし

詞書　同じ時夕暮になりて、二首○陰暦六月晦日は夏で七月は秋である、其境目で時雨は秋の景物故、蟬の時雨は今聞えるのであらう。

今日のみと聞けば夏さへ露けきに秋風たゝば何心地せむ

今日のみと、今日限りと、聞けば、思へばといふ程の意、何心地せむ、どんなに佗しい思ひをするであらう、季節を惜しむ心のよく表れて居る歌である。

秋近くなりぬるまゝになく蟬の聲も時雨とあやまたるらむ

詞書　夏のはてに蟬のなくを聞いて○前の聲の時雨と聞ゆるはの歌と同巧にしてやゝ劣る

舊短歌の慣習としてかく趣向をたてゝ詠んだものであらう。

來る秋は草葉の露にしるかりき耳驚かす風は吹かねど

詞書　秋立ける日よめる、二首○しるかりき、はつきりして居る、著しく眼だつ意、秋の立つた事は草葉におく露ではつりして居る、耳を驚かすほどの風は吹かないけれどもの意。古今集の風の音にぞ驚かれぬる、などを參考にしたのであらうがこの歌はその反對を詠んで居る。

あかつきの枕の露も片敷の袖にこぼれて秋は來にけり

枕の露、涙にて枕のぬるゝこと、千載集、鳴き交す秋のねざめは虫のねも枕の露も涙なりけり、山比子は長い獨身生活をつゞけた、他の友人知己世間の同年輩の人は子を持ち、孫さへ持つて居るのに、秋風の立ち初むる頃の彼は、帶もとかずに衣かたしき寢る夜が多かつたであらう、そうした夜な夜なの枕のしめつぽさ、寂しさは想像され同感もされる。

物思ふ袖は常さへ露けきに秋はたちぬと我に知らすな

詞書　秋のはじめに物思ふ袖、物思ふ人の袖はいつも露けくしめつぽい、古人は袖と涙とに關聯して多くの造語をした、新古今集に物思ふ袖より露や習ひけむ秋ふけゆけばたへぬものとはとあり我に知らすなの結句は我心を動搖させて呉れるなといふ程の意である。

ただしふる時雨の音と聞ゆれど下の暑さは去らざりにけり

詞書　山川のほとりにて蟬のなきけるを○ただしふる、ただしく言へばの意、蟬の時雨は古く俳諧に用ひられたが、歌の方ではそう古いものではないらしい歌は凡作。

露ながら衣は摺らむ萩の花ぬれだる色ぞこやまさりける

詞書　萩の露○露ながら、露のまゝに、衣は摺らむ、衣に摺りつけやう、こや、これがまあ、一首の意は、露のしつとり置いた露の花それをそのまゝに衣に摺けやう、これがまあ、そうした方がまさつてよろしい。萬葉集に、月草に衣は摺らむ朝露にぬれての後はうつろひぬともとあり古今集、拾遺集にも類型歌がある、この歌總穩寺の墓石に彫られ得意の歌らしいが、結句やゝ弱い。

さを鹿は妻戀すなりうべしこそ萩の花さき秋めきにけり

詞書　萩をよめる○妻戀すなり、妻戀してなく聲のする事、うべしこそ、左もあればこそ、鹿の鳴く時期は秋と見えて萬葉集にも、秋されば山もとどよみさを鹿は妻よびとよめとありて、昔は日常生活にも直接交渉があつた譯だが我等には緣遠い題詠である。

紫はうつろひ易き色なれば心しておけ萩の上の露

詞書　萩の露をよめる、二首○歌意明瞭である、同情もあり潤ひもあり、結句の字餘りも

よく据つて居る、四句も使ひやうによつては厭味のあるものとなり易いがこゝではさうした感じを持たせない。

紫の色し濃ければ萩の花露にひぢてもあせずぞありける

萩の花の色は紅紫を帶びて居るから、色といふものゝ分類法の大ざつぱな時代は止むを得まいが、やゝ無理な表現である。

雨ふらば散りもこそすれ萩の花いざ月影に折りてかざさむ

詞書　萩の花の盛りに月いとおもしろかりけるを○かざさむ、かざしにさすこと、表現の上から言ふと一二句切實を缺く、庄内地方の秋に入ると雨と風は實に多いから、同感出來ないといふ譯でもないがこれでは概念的な感じを與へる、後撰集に萩の花を折りて人に遣すとて、時雨ふり降りなば人に見せもあえず散りなば惜しみ折る秋の萩、とあり。

吹く風にしほるゝ萩の枝よりも惜しむ心ぞまづ亂れける

詞書　萩の花さかりに○風が大變吹けば、風は枝を吹き搖する、枝のゆれる事によつて花はいためつけられる、そのあり樣を見て居ると心の落付をなくして見入られる事である、春の歌に花の盛りに風いたう吹ければの歌と同巧の作である。

うつらふを忍びかねてや出でつらむ花にも背く身とし聞かねば

詞書　禪中法師が庵に萩の花見に行きけるに、主の法師よそにいぬとてなきほどなりけり萩の盛りは過ぎて散り方になりけるを見て○うつろふ、うつるの延言、山比子の歌として は珍らしく諧謔に富んだ歌である、法師は世に背くとは聞いて居るが、花に背くとは聞いて居ない、花のうつろふあはれさに家を留守にしたのであらうと、主人に逢へない心殘りは言はずに居る。禪中法師、本名五十嵐仲治鶴岡市荒町に住み米を商ふ、八木屋と稱す、寛政四五年頃家を長男に讓り、總穩寺二十二世元能和尚の弟子となる、時に五十三、新士町破鏡庵に住す、片町と鳥井川原間の内川を渡舟によつて往復する不便を憐み、自ら寄附を受けて橋を架す、禪中橋といふ。

女郎花折りだにすれば名は立ぬ手もふれ難き花にぞありける

詞書　女郎花をよめる○後撰集に、折からに我名は立ぬ女郎花いざ同じくは花花に見む、とあり本歌としたものと思ふが下句は作者の感動が流れて居り据つた表現である。

墨染の袖になふれそ女郎花色くちなしの花にはありとも

詞書　羽黒山の奥に荒澤といふ處あり超海法師が住みたる聖之院といふ山寺に女郎花植ゑ

たるを見て○墨染の袖、黄色の淨衣の袖僧の着る法衣の袖、色くちなし、口なし即ち口には言はいとのかけ詞である、くちなしは黄色よりやゝ濃くして赤味を帶びた色である、女郎花はなまめかしいものとされて居るので、荒澤のやうな神聖視された土地の環境と道心堅固の法師とに興味をもつて詠んだのであらう、超海法師は明かでない。

草も木も秋のしめたる野邊なればしたばもらさず露おきにけり

草にのみおくものとのみ思ひしが露はねざめのものにぞありける

詞書　露をよめる○二首目、一首の中に、のみを二ヶ前に用ひて居るのは不手ぎはである。

寂しさは宿のへだてもなかりけり垣ごしにふく荻の上風

詞書　隣の庭なる荻をよめる○隣同志は簡素な垣根ど仕切つて氣易くして居たのであらう隣の庭の荻叢に渡ると見えた風は自分の庭にも同時に吹いて來る。

佗びしらにいたくな啼きそきりぎりす我身もねにはたてぬばかりぞ

詞書　虫、二首○二句の、いたくなの詞目だつ、下句は巧みである、古今集に、きりぎりすいたくななきそ秋の夜の長き思ひは我ぞまされる、この作は本歌どりをやつても新工夫をこらして、それが非常に重苦しい表現となつて居る孤獨性に馴れしめた生活の反映であらう、彼の生活を理解なしにこの歌を見ると、下句は突然の感をなさしめる。

松虫の聲する方に立よれば野原の露の宿りなりけり

歌意は松虫のなくねの美しさに、つい誘はれて何處で啼いて居るものかと尋ねたら、露のしつとりとおく草むらであつた、古今集に、秋の野に道も惑ひぬ松虫の聲する方に宿や借らまし、とありて同じ境地に近い歌ではあるが、更に開拓して居るものがある、さび、幽玄の體などいふ處の寫情味がある。

松虫のねの弱るこそ來ぬ人のかれゆく秋の果しなりけり

詞書　松虫のねのいみじゆう衰へたるを○かれゆく、離れゆくにて遠ざかるゝと、枯れゆく緣語、松虫のまつは待つの意を來ぬ人にかけたのであり、秋と飽きともかけたのであらう、手のこんだ技巧的な歌である。

穗に出て招く袂や見えつらむ尾花がもとに君が來ませる

詞書　すすきのもとに人たてり○古今集に、秋の野の草の袂が花すすき穗に出て招く袖と見ゆらむ、の歌から換骨したものであらう、それにしても自己の幻想的な色彩を巧に出して居る。

なく鹿の聲きく時は山里も住まひはつべき心地こそせね

詞書　鹿、三首○住ひはつべき、住み果てそうな、ありふれたる境地である。

秋風に聲うらぶれてなく鹿は今宵も妻に尙や逢ひ難き

うらぶれて、心詫びしくの意、秋風の寂しく吹き渡る宵に他の鹿は元氣よくないて居るが其中に詫びしげに啼いて居る鹿は今宵も妻に逢ひかねてあのやうにして啼くのであらう、この歌も作者の孤獨な生活からの幻想的な想像によりて詠まれて居る、結句の放膽な言ひ方がかへつて一首を据つたものとした。

妻戀ひはこるべきものと知らねばや今宵も鹿はいねがてにする

こるべきものと、こりこりするものとの意、いくら戀しい妻をたづねても逢ひ難いのだ、それにもこりごりせずして夜も寢ない鹿は、そういふ事を知らないのであらう、前の歌とは連作と見るべきものである、古今集以下に多く詠まれた題材である。

聞くたびにうき秋風の音ながらこりずまたるゝ袖のうへかな

詞書　八月十日餘りに殘暑いと堪へ難かりければ○下句は今の我等には緣遠い表現法であるが、古歌にはこりずとか袖の上かなとかの成句は用ひられて居る。

蔦深き窓には月の影をさへさしこもれりと人や見るらむ

詞書　窓の內に月といふ心○蔦深きは歌全體と遊離して居るやうだ、結句も抽象的である。

弓張りの月の光しあかければ水の底にもいると見えけり

詞書　水上の月○弓張りの月、弓を張つたやうな月、あかければの言ひ方適切でないかも知れぬ、結句も。

いつもかく月はさやけきものならばたへてぬる夜はあらじとぞ思ふ

詞書　八月十五夜○仲秋明月に對して作者の感懷をよく出して居る、拾遺集に水のほとりにてよめる歌數首あり、それらに暗示を得たものであらう。

しばしだに見え來ぬ影をいたづらに月に數へて我や待ち來し

詞書　八月十五夜雨ふる二首○今の人達にはこの奧に歌あり等と言ふかも知れぬが、作者の意途した氣持には同感出來る。

時しもあれ今宵や月のくもるべき常に見るだに飽かぬ光を

時しもあれ、時もあらうにの意、この歌は作者としては敏感さが働いて居てい、歌である。

かくばかり月はさやかに照らせるを木がくれて住む我宿りかな

詞書　月六首○さやかに照る月は隈なく下界を照らして居るが自分の宿には照らしてくれない、木がくれてすむは、樹木のかげと云ふ譯ではなく、滿たされぬものゝある失意に心が曇つて居るである。

月みれば昔の事ぞ戀ひらるゝ立さだまれるかたみならねど

歌意は月は誰の所有とも極つたものではなく片身を宿して居るものでもない、それにも係らず昔を思ひ出さるゝのはどうした事であらう、古今集に、子規はつ聲きけばあちきなく主さだまらぬ戀せらるはた、續古今集に、主さだめたる匂ひと思はゞ、とあり。

くもりなくさし入る月の人ならばかれず訪ひ來と言はましものを

かれずとひ來と、始終訪ねて來いと、歌意明瞭、作者の月にあまえて居る寂しさにも同感出來る。

しばしだに雲なかくしそあきの月あけての後はさもあらばあれ

雲な、なは雲の動作を禁止する語、さもあらばあれ、如何やうにあらうとも、作者の氣持はわかるがやゝ理せめで潤ひのないものとなつて居る。

打ちはへて月夜なあけそ同じくは今宵ながらにいつも見るべく

打はへて、引つゞきて、結句が輕すぎる感がある、古今集に、何處にか今宵の月の見えざらむ飽かぬは人の心なりけり、とあり月の歌は古今を通じて實に多い。

かくばかり清き月夜はあるものをはれぬ思ひは我のみぞする

この作者の日常の物の乏しさや、家庭的に惠まれないことを思ふとこの歌は、心をたかぶらして詠んだものではないと思はれる、孤獨の寂しさを詠んだものである。

見るにつけ聞くにそへつゝ秋の夜の思ひつきせぬ我心かな

詞書　月のいと面白かりける夜砧をきゝて○きぬたは衣板の約とせられ石或は木にて作つだ、打盤に衣をその上にのせて槌で打つその音をきゝてといふのである、昔は各戸に於て衣を打つ音が聞えたものである、秋になると洗濯したり糊をつけたりした木綿の衣服は堅くて身に添はないから、それをいためる爲めに叩くので、多くは女の仕事である、萬戸衣を擣つの聲と唐詩にもある、獨身の作者は月光の隈なく照るさへあるに擣衣の音をきくは、ひとしほの愁思をそそる、よその家にはもう秋から冬に入つてゆく衣服の始末も出來た、ひとりである山比子には身のまわりの世話をして呉れる人もないのだ。

衣うつ聲にたぐへて誰かこの夜寒をよその袖に知らする

詞書　擣衣○聲にたぐへて、聲に並べそへて、よその袖に、自分の袂にといふ程の意、續古今集に、さゆる夜のねざめの千鳥折からやよその袂に涙知らする、歌意は寒さになりゆく頃の、衣を擣つ聲は冬衣の用意もない彼をして、涙を流さしめたのである。

主しらぬ擣衣なればか山びこの答へもうはの空に聞ゆる

詞書　きぬたいづこ○主しらぬ、誰のためともきまらぬ、擣衣の音はするが方角もしかとせぬ、その反響もうはの空にきこゆる、恐らく空閨を守る人であらう。

獨りあかす人やねざめの曉をすさめがてらに衣うつらむ

詞書　曉の擣衣といふ心○すさめがてらに、すさむ心のまゝに、歌意は朝早く衣をうつて居るのはねられぬまゝに、起き出て衣を打つのであらう、その人は多分獨ねをして居たのであらう。

ものごとにうつろひゆけば秋風を思ふ中には吹かせざらなむ

詞書　秋風、秋の風は總べてのものをうつろはす、他のものもは兎もかく相思の人の間にだけは、吹かせたくないものである。

もみぢ葉は草木の色のはてなれど年毎に見る秋ぞすくなき

詞書　紅葉をよめる、三首○下句は年々出あるいて見に行くことは少くなるの意、老境に入つた人には同感出來る。

時雨つゝ染る木の葉を我袖に思ひよそへてあはれとぞ見る

時雨の降る毎に色深くなりゆく木々の葉は、つぎつぎにつらい事の出てくる自分と相通ずる樣で、あはれであるの意。

くれなゐに降る時雨にはあらねども濡るゝ木の葉はうつろひにけり

こだはりもなく幼い心に詠んでゐて、素直なよい歌である。

山路には生ひぬものから菊の花盛り久しく匂ひぬるかな

詞書　菊をよめる○生ひぬものから、生ひぬるものから、この菊は野菊である、古今集に ぬれて乾す山路の菊の露のまにいつか千歳を我は經にけむ、萬葉集に菊なく楚辭に梅なしとせられ、當今觀賞の菊は奈良朝末期に支那より渡來したものだと言はれる。

雪とのみ色はまがひぬ長月の有明の月の照らす白菊

詞書　曉方の菊を見て○今の人は雪を見て花を連想したり、花を見て雪を連想したりは出來ないが、古歌に於ては作歌上あたり前であつた。

つひにゆく秋のかたみは何せんに我袖におく露も殘すな

詞書　秋のはてに○ものうい秋とのみ思つたのも過ぎては名殘惜しい、袖においた露も殘りなく逝く秋と共にかたみとならないようにしてくれの意、北國人らしい線の太い詠み方である。

とりとめて何てふ事はなけれども秋の夕べは悲しかりけり

詞書　秋の夕ぐれに○薄倖な歌人が秋の夕ぐれぼんやり端居して、そこはかとなく感じたまゝをあらはしたもの、平凡ではあるが作者の寂しさを思はせられる。

身のうさを慰めぬべきものならば月見てだにも秋を過さむ

詞書　月を見てよめる○前のうちはへて月よなあけそと同巧である。

これで秋の部は終るのだが月の歌は實に多く、五十首の中十五首を數へる。

○

世の中に秋はてぬれば涙さへ時雨にそひてふりにこそふれ

詞書　しぐれ、二首○この歌を單純によむと誇張のやうに聞えるが世の總てが自分といふものに背を向けて居ると感じて、一杯な作者の生活を思ふと同感出來る。

時雨する空の心ぞ定めなき降りみ降らずみ晴れみ晴れずみ

詞書　殘の菊○菊は秋のものであるのに、冬も尙咲き殘つて居るのは秋らしい露のおくことであらうと、即興的に詠んだのである。

霜かれぬ菊のま垣に冬もなほ秋とひとしき露やおくらむ

詞書　冬の歌とて○歌意は冬がくればもう總べては雪に埋れると、きめてしまふけれども來だ萩の上風に秋の殘つて居るのを聞くと寂しい事だ。

冬枯るゝ萩の上にも秋風は憂かりし音ぞなほ殘りける

詞書　水に散れるもみぢ葉を○あやなかりけり、水の色と變りはない、嘗ては錦と見せた紅葉も水に落ちては水の色と變りはないあやなかりけり

紅葉ばの色は錦と見せつれど落ては水のあやなかりけり

詞書　冬の月木の下闇ももらさねど至らぬ隈は我身なりけり

冬の月をよめる○冬の夜の天心に照る月は繁る木の下も明るく見せて居ながら、自分の心はなぜかくも闇いのであらう。

眺むれば袂さえゆく冬の夜の霜は月より奥にやあるらむ

詞書　冬の夜月を見て○歌意は月には親しみがあつて寒さは感じないが、霜は袖に冴えるのを見ると月より奥にあるのであらうの意

音もなく凍れる瀧は我なれやしたに流れて知る人もなし

詞書　瀧の氷○表面は凍つたやうに見える自分ではある、けれども瀧の氷の下は忍んで水が流れて居るものだがその様な自分であるとは人は知らないであらうの意、充分な表現とは言へない。

獨寢の夢さまたげて降る霰あなかしがましいやはねらるゝ

詞書　あられ、二首○いやはねらるゝ、いは寢る意、やはは反語、寢て寢られやうかの意い、氣持で寢て居た作者は霰の降る音に目をさまされた、家中霰の音に聞える夜半に、吐き出すやうな焦燥を感じた氣分は同情に餘りある。

山おろし降るや岡部の笹の葉にあられたばしる音のさやけさ

四句が張つたのに結句は弱すぎる。

打とけてみなるゝをしの思ひには凍る夜半さへ凍らざりけり

詞書　水鳥三首○みなるゝ、身なるゝと水馴るゝとかけて居る、おし鳥は夫婦愛の深い鳥だと言はるゝ、其愛情は凍るものさへ凍らせないの意

にほの住む冬の池水凍るめりそこの通路なかや絶えなむ

にほどりのそこの通路絶えぬべしとほるわびしき冬の池水

にほ鳥の通ふには、水を泳いで通ひ合ふのであらう、その水も凍つては中も絶えて、通ふ事もならぬであらうといふのであるらしい。

とがりのゝ道うづもれて暮れぬればゆきあはすべき方も知られず

詞書　鷹狩○とがり、鳥を狩りたつること、道埋れては突然であるが、ゆきに行きと雪とをかけたものと思はれる、行きあはすは鳥と鷹とを合せて捕へることである。

和田津海は時雨も霜もよそなれや見る目は冬もかれずぞありける

詞書　冬の海邊といふ心○この歌はかの有名な古今集の、花も紅葉もなかりけり、の歌より暗示をうけたものであらう。

夕月のかげや殘ると見るまでに曉やみにふれる白雪

詞書　雪二首○此地方では一夜に雪の五寸も一尺も積ることがある、夜寢る時は夕月夜で

あつたのに、あけ方に見ると眞白になつて居るのなど珍らしくはない、そういふ處に興味をもつたのである。

珍らしと見るほどばかり初雪もかつうとまれぬ我身ふるれば

結句は初雪に更に降り積るのと、身のなりゆくのとをかけたのである、言葉の上の遊戯化して居る。

いづこよりよせて來つらむおぼつかな高根よりまづ見ゆる白波

詞書　山にふれる初雪をよめる○この歌は拾遺集の、春霞たてるを見ればあら玉の年は山より越ゆるなりけり、などから暗示をうけたものと思はれるが、どうも感服しない、初雪を白波と觀察するなども無理である。

霜ふりて枯れたる枝に咲く花は春をも待たぬものにぞありける

詞書　雪のふりける日、二首○霜ふりて、多分樹氷の事であらう、春をも待たぬ、春にさきがけて、冬になるとたまに霜のやうな樹氷が美しく、花の咲いたやうに見える事がある、觀方は幼稚でも精一杯の處がある。

とし暮れて降る白雪は枝毎に咲きて春待つ花とこそ見れ

莊内地方に住んで居ると風の吹く日はともかく、風のない日が二日もつゞいて雪の降つたあけぼのなどは、見る限りの樹木は美しく花の咲いた如くに見渡される、一句、としのくれにでなければなるまい。

よもすがらねやに起き居てあるものはたゞ埋火と我となりけり

詞書　埋火○おきは自分の起きて居る事と、炭火のおきをかけて居る、夜半四邊音なく森々と更けゆく時にかく興じた、それだけの歌に過ぎない。

來んとしのしるべの風や吹きつらむ春のこなたに花の匂へる

詞書　年内にさける梅花をよめる○俳句では季節といふものを非常に重く見る、歌の方はさほどでもないが、尙梅は春のものであるのに冬にさいた、これは春の道しるべによつて咲いたものであらうの意。

あし垣のへだては殘るひとよにて春の隣となりけるかな

詞書　春隣ををしむといふ心を○ひとよ、一夜とあしのひとよ(節)とをかけて言つて居るもう季節の觀念をなくして居る我等には、緣遠い歌ではあるが古人は多く興じて歌にした題材である。

ゆく年もあはれなりけりめのまへの春にもあはで暮れぬと思へば

詞書　としの暮六首○年月を人格化して詠んだのである、此作者は三代集あたりの歌によつて陶冶され、個性と環境を著しく殘却して居る歌を折々に見うける、これなども其一例である。

いたづらに過ぐる月日も積りては人は老いぬるものにぞありける

おいらくは來てもとまらで歸るやとことしの年のくれずもあらなむ

はてはては我身につもる年月をとまらぬものと何惜しみけむ

とりとめし事だになくていたづらに今年も遂に過しつるかな

年の内に殘る日かずをかぞふれば昨日今日とて今日もくらしつ

最後の歌はよい年末の慌しさが出て居る、我等の日常は誠に平凡である、平凡の中に自己を見出そうと努力するものゝみが撰ばれたる人である、斯くて概念から歌はまづ一歩前進しなくてはならない。

○

ならはねば戀するわざも知らなくに誰に聞てかいねがてにする

詞書　はつこひ、二首○歌意は戀については嘗て習つた事はないが、かく眠り得ないのは誰かに聞いた事もあつたのだらうか、四句適切でない。

うたゝねはいつ世の常になりぬらむ戀するすべも知らぬ我身に

この歌これだけの表現では解されぬのだが、古今集に、うだゝねに戀しき人を見てしより夢てふものは頼みそめてき、拾遺集に、いざやまだ戀てふことも知らなくにこやそなるらむいこそねられぬ、などの歌を頭においては讀むと理解出來るやうに思ふ、心餘りて言葉足らぬと言ふ處であらう。

夏虫に我身をなして心からならぬ思ひにこがれ果てつゝ

詞書　あはず○夏虫に、夏の虫は灯に身をこがしてしまふ、それにたとへたるもの、逢へない悶えである。

まちわびて閨へは入らじ山の端に傾く月のかくろひぬとも

詞書　まつ○戀するものゝ弱さとでも言ふか、そうした感じよりわざとらしい表現になつて居る。

いつはりの頼めとかつは知りながら暮るゝ夜毎に待たれぬるかな

詞書　よをかさねてまつ○毎晩來ると言ふのは僞りで空頼みと知りながら、夕方になると今夜こそと待たれることである。

たのめつる人は來もせぬ月夜とて待たずみ思ふほだしなりけり

詞書　ちぎりて來ず○今夜はあひに行きませうと約束した人は時間になつても來ない、い、月夜だから考へる事なしに月を眺めて居やうと思つても、尙引つけられる事である。

逢ふ事もうつゝも夢とまどはれつつらき夜に見し心ながらに

詞書　あふ○つらき夜に見し、まちにまちて逢ひ得なかつた苦しい惱みを經驗した心もちでの意である、古今集に、思ひねの夢にだに尙つらき夜にとありて、うつゝに體驗したのだから餘りのうれしさに夢と疑つたと言ふのである、多く歌ひだされた題材ではあるが、作者の眞實味がある。

あかつきの枕ばかりは名に立ちてちり打拂ふ事もなかりき

詞書　曉に逢ふ○枕ばかりは、共寢をする意、千載集にかり寢の床の枕ばかりは、また、哀れとも枕ばかりや思ふらん、相思の間柄は世間の噂にのみ立つて枕の塵を拂ふやうな事は未だして居ないの意

うれたくもなくなる鳥か曉の涙は人の袖にまかせて

詞書　別れんとす○うれたくも、嘆かはしくも、夜明けになつて鳥のねにおどろかされて別れのつらさを詠んだのである、この歌は他のまわりくどいのに比して、しやんとして居る。

歸り來てほどもあらぬに年月を過しゝがごと戀しきはなぞ

詞書　あした○戀人の許から歸つての氣持を詠んだのである、俗謠にも『今別れ道の半町も行かない内にかうまた逢ひたくなるものか』とありこの作者は粹人といふよりも又は苦勞人といふよりも、戀の敗者で苦杯をなめた人なのであらう。

思ふてふ人をばなどか忘るべきいとはれてすら戀しきものを

詞書　あひ思ふ○歌意は明瞭である、下句の發想やゝ拙い、戀の場合は多く反對の現象になり易い、これは作者の溜息だと見ればよい。

枯れはてむ心も知らで初草のうらなく人をたのめつるかな

詞書　絶ゆる○枯れはてん、枯れと離れとにかゝる語、初草、うらにかゝる緣語、うらなく、裏表なくつゝみなく。

わが中は久米路の橋にあらねども夜のちぎりの絶えて久しき

詞書　絶えて久し○わが中は、二人の間柄は、久米路の橋、大和國久米川に架けたる橋、役の小角が呪術を以て葛城山より金峰山に石橋を架け、これによりて一言主神を縛れりと言ふ故事により、男女の中の絶ゆるに言ひ習はした、後撰集に、中絶えて來る人もなき葛城の久米路の橋は今もあやうし。

秋風はいつのひとまに吹きそめて心木の葉とうつろひぬらむ

詞書　かはる○ひとま、人の見て居らぬ間に、秋風は飽きに通はしたもの、餘りにすらすらと詠み下して切實さがないやうである。

何にこの忘れがたみをとゞめけむ見て慰むる戀ならなくに

詞書　絶えて後のかたみ○絶えたる後にかたみの品を見て詠んだのである、樂しかつたのは過去、現在は片身その物を見るのは苦痛になつた事であるの意

などてかく我身ひとつに嘆くらむ忘れて人の過ぐる月日を

詞書　逢ふて後に忘られて○下句は彼の人は何事もなかつた如くに月日を過して居るの意歌意は自分は戀しさに苦しんで居るが、嘗て愛し愛された人は何事もなかつた如くに、して居る事だ。

淺茅原枯れゆくなかの霜の上にあとさへ絶えてつもる白雪

詞書　冬にへだつ○歌意は短く生ひた萱の原は霜枯れになつて往き來も疎々しいのに白雪はつもつて中は絶えてしまつた。

思ひ出る折もやあると試に絶えたる後も驚かさばや

詞書　おどろかす○歌意はある事情のために別れはしたが、今も昔を思ひ出す事などありやなしや、試に彼の人を驚かして見やうか。

つれもなき人に見せばや涙川沈みはてゝも消えぬ思ひを

詞書　おもひ、四首、涙川、甚だしく出る涙を川にたとへて言ふ、敗者の泣きごとである相手は恐らく冷笑を送るかも知れぬ、詞書のおもひは怨恨を意味したものである。

駿河なる不二の烟も限りあれや絶えぬ思ひを何にたとへむ

人しれぬ思ひにつくす我身こそ夏虫よりもはかなかりけり

夏虫の火に入るよりもかなしさは生きながらやく胸にぞありける

詞の上の遊戯と言ふと茶化したり失禮になる場合は多い、戀愛歌は第三者から見ると、誠

につまらないのが多い、本人だけ催眠術にかゝつて踊つて居るやうなものだからである、この作者の戀歌は實におもくるしい、これでもか、これでもかと言つた、一律に猪突的な詠み方である。

もろともに思ふことこそかたからめあはれとだにも人はいはなむ
ものごとに始めも末もあるてふをなど我が戀の本末もなき
彦星にうさこそまされひととせに逢ふ夜もあるかあらぬ我が身に
秋風は吹きもらさねど我袖の露の宿りぞ乾く夜もなき
我袖は晴れぬ雲井にあらねども天津空なるながめするかな
妻戀ふる聲をし聞けば獨ぬるわが身も鹿となかぬ夜ぞなき
月影になぐさめかねて我が居れば萩の葉そよぎ秋の風ふく
もの思ふ宿にな照りそ長月の有明の月はいやはねらるゝ
長月の有明月はもの思ふ心づくしの限りなりけり
雪ふりて年はくるれどゆづる葉の色にも出でぬ戀もするかな
富士の嶺の烟もたえて久しきをなど我戀の消えがてにする

尙戀愛至上主義と見るべき歌に

いける命死ぬるは惜しき身にしあれど逢ふにはさてもかへんとぞ思ふ
戀すとて人の死にするものならば千たび八千たび死にもしなまし

以上の戀歌は彼の實生活とどれだけの交渉があつたかは、今日穿鑿の限りでもなく其餘地もないが、唯直觀的に感ずる事は以上の歌は單なる題詠であつたか、どうかといふ問題である、歌は弱者の溜息である場合が多いから、いくら題詠であつたとしても、何等の對象も相手もなくして詠むと言ふ事は考へられない、必ず心に描いた目標としたものゝあつた事と思ふ、以上の歌だとて言葉の上の遊戯三昧に終つてゐるものではあるまい、しかして彼の性格が社會的に又對他的に弱い事は、他人の幾倍も自己を苦しめ鞭打つて居たらしいしかし戀の勝利者は多くの場合に歌などは詠むまいと思はれるので、多くの歌を殘したるは、結果として、戀愛の敗者は歌の勝利者と言ふ風に考へられなくもない。

しかして山比子は離緣した嘗ての妻を、絶えず心に描いて居たのではなからうかと推察される、それは歌全體から見るとある集注点を認める事が出來るからである。

○

みやま田に朝居る雲やよもすがらかひやにたてし烟なるらむ

詞書　田家雲○かひや、鹿火屋即ち穴を穿ちて獸類の穀物を荒すを防ぐ裝置をいふ、み山田のみは接頭語歌意明瞭一本調子によんで居る。

いを安く寢るやまずみの心にもまかせぬものは夢にぞありける

詞書　山家の夢といふ心○歌意は人里離れた山家に心安らかに眠つても夢ばかりは浮世を離れぬ夢を見ることだ、世の中と斷ち切らうとしても斷ち切れないものがあるといふのである。

白波に身を浮舟の流れても遂によるの瀬の定めなきかな

詞書　舟のうちのうかれ女といふ心○うかれ女、遊女のこと、身をうき舟と、うき舟とうき身をかけた緣語、浮き舟と浮草稼業の遊女の行く先は定まつては居ない、末にはどなる事やらの意

程遠き山の奥には住みつれど我が世のうきはこりぬ日ぞなき

詞書　木こり○我世のうきは、世の中のつらさは、新續古今集に、さのみやはうきに年經んうき草の云々とあり、こりぬ日ぞなき、こりぬといふ成句は古歌には可なり使はれた言葉である、山木を伐り取る意と世の中のつらさの數々をこるとかけたのである、古今集になげきをばこりのみつみて云々とあり、我等には緣遠い歌である。

あだなりと人は言へども櫻ばな咲きそめしより色も變らず

詞書　扇の繪にかける櫻をよめる○一首繪に書いた櫻では實物の櫻とは違つて興趣はないと、人は言ふが咲いてから散ることのない花であるの意

○

千代とのみ何か限らむよろづ代もあかぬ限りは君がまにまに

詞書　人の賀によめる○この歌は池田玄齋六十賀に贈つた歌である、天保四年頃の作で卒直に詠み下して居る、池田玄齋と書いてないのを見ると山比子も、玄齋に對しては胸に一物あつたらしい。

はるばると君が千歳を數ふれば折る手もたゆく思ほゆるかな

つるかめのおとにのみ聞く萬代を君ながらへてためしにはせよ

詞書　吉田の翁が六十の賀に○吉田翁は西田川郡大泉村清水の大庄屋、護といひ歌をよくした、山比子及其門下と交遊あつた。

いにしへはとまれかくまれ櫻花この春よりは散らずもあらなむ

詞書　白井の翁が五十賀に櫻の歌○白井翁惣六郎重固、藏六庵と號す、莊內藩學致道館學監兼司業、この歌文政十三年の作である。

きくの花匂ふ限りはながらへて千代のためしは君もはじめよ

おとにのみきくの齡のよろづ世を千歳を經つつ見るよしもがな

詞書　きく○この歌も白井翁に贈つたものらしい、貫之の歌に、今日までは我を思へば菊の上の露は千とせの玉にぞありける、とあり古今集に、音にのみきくの白露云々とあり、きくは長壽のものとされて來た。

萬代の君がかざしに折りつれば花も常盤に匂ふなりけり

詞書　いは田のくろみが七十の賀に紅梅の造り花に添へてつかはしける○石田黑躬通稱清左衛門、大寶寺に綿屋を營む、萬葉風の歌を詠んだ、天保四年の作である、黑躬は文政六年六十賀を營み年來買ひ集めた書畫骨董を、友人知己に各々好む處の物をことゞく分ち與へた。

○

數ならぬなげきの森の下葉さへもるゝ方なく露にぬれつゝ

詞書　先君珪德院殿のかくれさせ給ひける時に○珪德院は藩主酒井忠德、中興と言はれた名君、文化九年に歿す、なげきの森、大隅國姶良郡國分村大字內村にあるといふ森、古事記蛭兒の古事に依る、金葉に、いかにせん嘆きの杜は繁れども木の間の月のかくれなき世を、山比子三十九歳の作、哀傷歌として立派な作である。

老ひの身のそでこそいとゞ悲しけれあるにもあらず世を過し來て

詞書　悲しひの歌、思ふことありて詞書をばもらしつ、七首○四句非常によく据つて居るので哀れもひとしほ深い、老いの身と言つても何歳頃かわからないが、前出の歌と同時頃の作か、やもをである嘆きの作であるらしい。

人知れぬ涙も今は色に出む忍びはつべき歎ならねば

自分だけが懷いて居た嘆きの涙も忍び切れなく人に知られるようになりそうだの意

同じ世にあらぬを忍ぶ涙さへなほ人目もるなかぞかなしき

歌意不鮮明である。

花にだに心とまらぬ鶯はかれにし枝に音をのみぞなく

花は咲いても花には目もくれない、昔の枯枝にとまつてないて居る鶯のあはれさは、自分の今の氣持であるの意、かれにし枝は枯れと離れとをかけた緣語。

ちる花も今こん春は咲きなましかれにしかげぞたのむよもなき

この歌も歌意不透明である、四句も穩當でない。

血の涙袖にはかけじくれなゐの色に出てゝは人もこそ知れ

世の中は夢路ながらに過ぎななむ現にしあれば逢ふよしをなみ

夕けぶり絶えて久しくなりにしをいつまで消えぬ我が思ひぞも

この作者はともすると、複雜な感情を詠まうとして單純化の行はれない場合は混線して不明瞭な歌となる。

藤衣もとの露だにかゝらぬを末の雫に袖はぬれつゝ

詞書　おほば君のおはす間にをち君の失せ給ひければ○藤衣、和名抄に不知古路毛喪服也、とありて葛布にて作りたるもの、上古は庶人平素の着用せるものと云ふ、新古今集に、末の露本の雫や世の中のおくれ先たつためしなるらむとあり、參考としたものである、歌意は先たつべきものは後になり、後になるべきものが先になる、本末の逆なるのを嘆いたのである。

秋風の寒くし吹けばかりがねも古き常世を戀つつやなく

詞書　相知れりける人のなくなりける年の秋かりがねのなくを聞いて○常世、永久に變らぬ國、常世の國の略で容易に到り難き國、西方はるかなる日沒の國の意なるべしとも云ふ古き、といふ詞はこの場合不必要と思ふ。

世の中は夢とのみやは言ひはてむ現にものぞ悲しかりける

詞書　おほば君の隱れさせ給ひける時○やは、疑問の助辭、歌意は世の中は夢だと言ふが果してそうであらうか、否夢と計りは言へない現在に斯く心苦しいのは。

おく露を人の命にくらぶれば日かげまつまも久しきものを

詞書　思ひこもれる人をとぶらひ遣すとて○人生の無常は迅速である、日かげの露の乾くのは可なりの時間があるの意、四句やゝ無理な語であるが詞書で補つてゐると見て良からう。

草の葉におく露よりもはかなきは風をもまたぬ命なりけり

詞書　もの學びに來ける兒供の中になくなりけるがありければ○草葉の露は風だに吹かな

ければ、落ちないが、風も吹かないのに散つた事であるの意と思はれるが四句やゝ適切をかく。

昨日までありつる人の聲をだに聞かで歸るは悲しかりけり

詞書　元助が身まかりける時弔ひに行つて歸るとて○この歌はありふれた感じ方ではあるが卒直でよい、元助は不明。

以上にて歌集は終つて居る、尙佐藤行道本には行道の暗誦して居た歌として。

桃の花かざしにさして玉の緒の命をながく延ばへつるかな

詞書　西山の桃の花ざかりに○西山、西田川郡西郷村面野山より濱中方面にかけての山、桃の名所で杉山廉女なども遊び白井玉井にも歌はれた、佐藤行道は其近くに住んで居たのだから山比子を誘つたと見える。

ゆく人の家に至るまでまかせてん幣たてまつる神のまにまに

詞書　谷口躬風送別○谷口躬風通稱金兵衛歌をよくした、白井固の歌集かくも草を編輯しその序文を書いて居る、文政四年八月十五日兇刃に倒る、此歌は躬風が仙臺を經て江戸に遊んだ時に贈つたものである。

此の他數首あるも佳作ではない、山比子の歌に關しての記述は他のものには殆ど見當らぬたま〳〵佐藤行道本の端に書け付けたものに。

古學に達したる人は、おのづから古歌に同じき樣なる事出て來るものなり、進藤倜が書きおこせたるまゝ傍に書付おくものなり。

とありて彼の目標とした作歌態度はこの短文の中にのぞく事が出來る、要するに彼の詠んだ題材の範圍は極めて狹い、しかも三代集をたんねんに讀んで範疇としたので多く其の外に出ない、しかして苦心の跡歷々として指摘する事が出來る、從つて天分に惠まれた歌人ではなかつた、大なる努力を拂つて到達した境地である、玄齋が指摘したる如く聰明を缺く作歌も可なり見うける、けれども尙捨て難いのは彼が藝術に對して烈々たる希求を持つた事で、其精神力に大なる同情と同感を持たざるを得ないのである、(註進藤倜、名は鼎と稱し莊內藩の町醫にして、學和漢を兼ね元治元年二月歿した)

山比子の一生は、晩年には中風に病臥して長じて家庭に惠まれず、其一生は、誠に不遇の連續であり、苦しむ爲に生れて來たやうな觀を呈した、飜つて考へ

れば如何なる人も、苦難なくして高級所には至り得ない、苦難は神の人に與える試諫である、この試諫を突破する事によると依らざるは凡非の別る、處であらう。

追記

頃日鶴岡市十日町の古文書蒐集家渡邊傳八氏に立寄つた、談たま〳〵山比子に及ぶや、山比子の書翰數通所藏するとの事、早速拜借して一見するに、今野收助に與えたものであつた、其中の一通宛名は逸して居たるも左の如きがあつた。

明後十四日より手習相始候御出可被成候

八月十二日　山比子

米太郎　鐵三郎　良治　清吉　久太

良吉　金助　茂三郎　乙吉　己三郎

三代治　伴吉　熊太郎　伊之助　泉太

金太伊　平直太郎　安吉善助

祐之助

此廻狀は何年頃のものか推定されないが、やゝ晩年に近いものと考へられる、收助當時當番になつて居たものかも知れない、尙收助とは次の手紙によると、親族付合ひをして懇意にして居たやうである。

收助様　山比子

頃日はあまり暇なく大に御無音仕候御母上様へも乍憚宜しく御心得可被下候

頃日はあまり暇なく此間は御繁多中御出被成下御慇懃の至奉存候、且御細々あまり御入念の至奉存候、御病人様兎角御六ヶ敷被爲入候由然々御困の御事奉存候依之神符又々被成御頂戴度よし承知仕候則もらひよせ差上候猶御大事可被成候追て可被遣は御盃御もたせ被遣可被下是は手前のに御座候間追て御返し可被下候

三月二十四日

昨日は御留守中御馳走相成難有奉存候、さて明日根木屋御招に付私も上り可申様に御內儀様被仰下候に付、兼て御約束事故可上積に申上置候處、今朝ふと思出候には重服被御祓光臨の御座敷へ推參可致事可有其恐儀に御座候に付殘念に御座候へ共、當年は上り申まじく候明年の事に仕度候、依之御斷申上候艸々

十一月四日

猶々淺平よりの御返事いよ〳〵不埒成事に御座候併猶御近親得と御相談可然奉存候

収助とは常に心安く互に出入りして居り一家の出來事にも始終往復し、吉凶禍福につけても心使ひをして居たらしい、更に山比子が病氣に苦しんで居た事は次の手紙によつて窺はれる。

如仰嚴寒皆様御機嫌能被成御揃奉喜候、御尋ねとして何よりのとしやう被下難有仕合頂戴仕候、僕は快氣仕候間御安堵可被成候、母事も御尋被成下難有奉存候此寒氣には大にこまり居り候間迷惑仕り候、近日以來御禮可申上候、家内へも御傳書不下いづれも宜敷被仰遊可被下候

十二月十四日

乍思御無音背本意候、御病人樣方御快方の御事と承候處今日金助殿に尋候處不出來の樣に被御申聞候、御困の御事御心痛奉察入候若御藥無御相應者他へ爲御見被成候方可然と奉存候、誰と申候てしかと可然仁も無之事に候へば御みくじなどにまかせ候半可然か私一切他行致しかね候に付今日〳〵と見合候へ共何となく不宜樣にて未た出かね居候猶以來可申承候へ共一先御樣子しかと承度如此御座候以上

六月十二日

猶々此間は珍敷ざつこおびただし〳〵被下難有頂戴致候猶御禮期拜眉候以上

日に增殘多可被思召出奉察候、此間は家内の者共追々罷上御馳走頂戴し難有仕合奉存候今日御念佛に上り可申處昨朝より脇下けいれんいたし候處夜半に至り心下候通し痛甚しく今曉まで横寢成難く殆ふせりかね候今日に至り候ては追々快服横寢はならるゝ樣に相成候へ共痛いまだ止りかね候右に付妻今曉は御念佛濟候はゞ御暇申請可歸樣被仰付可被下候但快き方に御座候間必御案事被下まじく候右申上度草々以上

五月二十一日

収助は大庄屋として生活も豊かであり、日常人の出入りもあつた、又風雅の道も解して居り、その方面の交友もあつた事は、次の手紙によつて消息がわかる。

山比古大人　貴答　玄齋

貴翰拜見如命先夜は得貴顔大慶不斜被存候然者朝夜大寶寺へ御誘引被下千萬辱被存候、閑

日故御供可仕候水野君への儀遠方にて一人家來風邪にて臥居候間手習子へ此手紙爲御持被遣下度奉希候萬々明夜雅譚と早々及貴答候尤何も御世話必到と御無用此段は収助殿へ宜しく御斷被下度奉希候扨て妙興と大樂しみに御座候丹羽殿雅人故急度御咄も合可申被と被存候草々

二十一日

玄齋

収助様

山比子と直接關係は持たないが玄齋の収助に贈つた手紙は何かの參考になると思ふから次に掲げる、これも渡邊氏所藏のものである。

先達は預貴臨乍暫得玉眉大悅の至御座候乍併余草々無御愛相遺恨不少候、何よりの御品々は千萬忝奉存候、扨小寺文虹先生の歿年は寶暦四年正月七十三にて死去也、前年冬の頃より病氣にて地藏念佛の戲作一卷あり、死を極められしと見えて辭世の句の如く

いざさらば置きみやげせんむつの花

といふ句あり、此人豪傑也父も五郎兵衛とて三百石を被領候處、妻木平八仕合の節取計方あしく御暇出候處、信正は御切米にて被召出新知百五十石被下、龜城の警固に被思召候と見ゆ、夫故酒田城中に有之立石六左衛門の鑄たる大銃其後打人なかりしを信正に至て再び試み、又自着料の甲冑を帶て鎗を携へ十里の道を歩行せしと云ふ、堀季雄は文明六年十月十日病死せられたり、享年僅五十一歳の間に承露盤、日枝折百卷、しの系譜の考の類色々著述ありしは可感服事に御座候其外北條流の兵學に通候て著書有之才氣拔群に見へ申候、大泉往昔よりの才學兼備後世の師とも可稱は小寺堀の二雄に可有之かと存じ候、いづれも文武有用の器量にて卓見不凡の人に御座候、今時句を綴り文を玩ぶ白面黃吻の儒生の企及處にあらず、德行には賀季和、政事には棠蔭華竹華陰三大夫を始め子產管仲にも耻ざる人材のみ出られ候、これも時運の然らしむる處なるべし、當世亦人なきにしてもあらざめども伯樂なければ駿馬も知るべうもあらずやと存じ候、筆に任せ御妄言御妄聽あられかし

草々

如月十二日於燈下認置候

池田玄齋

野今収助様

○鳥は得寛慮大悅瑞雷翁より別紙申義候間乍御面倒此狀無滯屆候樣に奉希候御健にて奉恭

壽人生一日たりとも無恙を幸福とす、夕燒跡御記し爲御見可被下候猶期面上候

六月十日認置

ついでに付加すると今野收助の墓は鶴岡市大寶寺の禪宗宗傳寺境内にある、晩年門人等の建てた壽碑は鶴岡の學者服部昌樹が書き同じ寺に建つて居る其全文は

翁氏は今野名は收助と稱へり、始め田川の郡の内をわけたる小名の山濱の多くの里のみとしをすゝむる事に仕へて、あらたまの年を重ねていそしめるに、同じ小名の京田といへるあまたの長にまけて功績をあらはし給へり、かれ愈ますます赤ぼしの赤き心を持て、あら木のあらた弓怠る事なく仕うるうちにも、其心切にまめなりしかば、早くより里のうなるを集へて手かくわざ、文よむわざをしも敎へ導きけめれ、敎うるとしては親に仕ふるにまめなるを初て、友に交はるに美しく、親族に厚く親しむべき道の行く手を、ほとほどにつけて導きにたり、翁今年七十餘り九の齡を重ねて、猶若子なすみさかりになもありけるがかれ敎をうけたるともがら相語らひて、高き功をかきはに長へに傳へんとて建つる碑になも言ふは橘昌樹

安政二年乙卯十二月門人建之

西田川郡東郷村青山郷社青山神社境内にも收助の壽碑が建つて居る。

今野大人壽碑

大人氏は今野名は正路字義甫收助は其通稱なり、安永六酉年に生れて今茲七十三歳猶康健にぞおはしける、若かりしより謹厚方正の聞えあり、文政二卯年山濱組の胥吏より擢られて京田組の里正とはなられたり、公務の道は勿論民の益となる事彼是多ければ、その配下は更なり他組と雖大人の厚德を慕はざるはなし、その功績多かる中にも取わけ當組は、用水に乏しき地所なれば平水すら下流の村々は行渡りかぬる程にしあれば、年々これに苦しみ若二三日も、日和つゞきぬればこれにより水のために、春夏は幾度となく堰へ通ひこれが爲に、耕耘の障りともなりおのづから人心穩かならず、他の煩ひをも顧みぬわざどもなきにしもあらず、大人深く之を歎きかれ部下の役人並堰守どもを召供して、酷暑をも厭はず幾度ともなく其水源に自ら往還をして、同組は言ふに及ばず外々共に我儘なる仕方を、嚴しく禁しめ上中下相互に助け合ふべき道理を懇に、諭されにければ人々その誠に歸服して、爭ふ事なく旱魃の歳と雖末々の村に至る迄、心安く田を潤す事とはなりぬ、これひとへに大人の賜物になむありけり、されればその恩惠を末の世迄も忘れざらん事を傳へまほし

く、村々打つどひて爰に碑を建つる事ではなせり、扨碑面は東都なる生方鼎齋先生の筆にして、背面は古野正明ぬし書れ碑文は御民に代りて友人玄齋が撰べるになむありける

嘉永二己酉年肇秋

牧助の父は中川組牧納方であつたらしく藤島町法眼寺に碑が建つて居る、歌をよくしたと見えて石に刻してある、これによりて見ると牧助は山比子と略同年だつた。

弘平錄に

山彦は富小路殿、魯道は庭田一位殿、堀口有恒は冷泉家と、皆々雲の上に名つきを參らせ鼻を高ふするを、固大人いと氣の毒に覺してかゝる戲文を作られたり、予も歌山といふ老女に深切に進められしかども堅く辭せり。この戲文實は建部山比子が富小路貞直卿の御添削を受けるに、亦堀口有恒はまけじ心に冷泉家へ名簿を奉りし事を聞かれて、暗に貶し給ふ意より一日予にのみ密に示し給へり

と誌して白井固の左の如き文を載せて居る。

今は昔出羽國なりける賤の男ありけり、世のひがものなりけれど惡さげなる顏にも似ず、大和言の葉を好めりける、されど所がらにやありけむ人柄にやありけむ、鄙びたるはさる事ながら、物のつゞけざまさへいとひがびがしかりけり、顏の赤ければ人皆興じて猿丸とぞ名づけたりける、此男如何なる事か思ひけむ或時

はかなしな袖の浦曲の濱千鳥古にし跡を尋ねてぞ鳴く

となん獨ごちけるを人聞きとがめて言ふやう、汝が好める道いともやさしく侍れど就きて學ぶ人もなく、古き集などをまさぐりつゝ獨すさびなれば、如何でかよしあしをも得わきまへ侍らむや、都にこそ何くれの家々多くおはしますに、自ら物し侍らずとも人傳だに其教を受くるやうもありなめ、さてこそは姿詞も自ら雅びたる優しき事もあらんかし、斯る片田舍に生ひ出し身の己が心もて、折につけつゝ詠みつゞへたりとも如何で業も進み、志す方をも遂げなんやと云ふ、かの猿丸眼打はたゝきて云へるは穴ことごとしくもの給ふものかな、やつがれも身におふはぬすさびなれど、年頃好める事にしあれば其心つきなきにしてもあらねど、もとより口にまかせて歌ひ出る言の葉は多かれど、こは歌などゝ言ふべくもあらず、形輪に侍るは己が心にもしるきを如何でか添なく、やんごとなきあたりを煩し奉らんや、やつかれが歌ひ出せる言の葉のよしあし、わきまふる計りの人此國にも侍る

める、されば己が詠み得たりと思ふ歌を、こゝらの人に計りでも猶なんつくま、きもあらばこそかしこまりも忘れて物し侍らむとは兼て心にかけ侍れとて

澤に住む田鶴の一聲えてしがなさてこそ雲の上も頼まめ

といふを、人々笑ひてかゝるかどかどしき事をつゞけぬればこそ言ふなれ、都人の引直し給ふなどもあらば、露ばかりも優しきふしも交りなむと思へば言ふなり、と言へばかの男申しけるは、げにの給ふ處ことはりに侍れど、そこ達さへ笑ひ給ふ歌をば雲の上にても、いかがし給はむ物に譬へて申さんには、凡直なりと見ゆる竹もよくすかし見る時は曲りたる處あるものなり、そをこそはそれぞれに隨ひてためなば自ら直なる竹にも等しかるべし初より曲りゆがみたるをば力あらん人にもせよ、いかで直ぐには引直すべき、されば己が力を盡して、大むね直なりと思はんだにも目よき人に見らるれば曲れる處多からむ、まして自らもゆがみたりと思ふものを人の力借りて、ためんとするは一文字もかゝぬものが、小野の宮に通夜して手をよく書かしめ給へと祈らんに、神もいかでかわりなしと覺えざらんや、又あるは雲の上人の教をさへ受けぬれば、誠の歌人の名ありなど曰ふめるは、頭さへまろめぬれば佛の御弟子と言はんに等し、あるはあやしき鄙び言を遥々と人傳に奉れば

あなやさし昔は蝦夷なりしを今はやう〳〵王化に習ひて、かゝる事わざもするよとてほと〳〵につけて、流石は見ゆるし給ふもたま〳〵あなるを、是ぞ瑾なき玉と思ひて人にもほこり自らも、冠いただきたる面もせんも、如何ばかり片腹いたきわざならし、さるは己を捨て人にかゝづらひて下なる人にも、事問ふは物學びの習に侍れどこは事にこそよるべけれ、上つ國の人は斯る片田舍をばえみしの樣におとしめ給ふをことならむ、かたわなる事をさしすくひて雲の上迄さらしなんは、我は我にまれ國人をさへおしなべて、おし計られ侍らんは國のおもてぶせとも言ふべし、忝なく思ひ侍ればざえある人はともあれ、やつがれらが如き及ぶべき事ならねば、の給ふ事なれどうけ難く侍る、世に長らへ侍りて一ふしも心にかなひてこゝらの人々にも、計りて難つくまじきしもあらばこそと、心に願ひ侍るなりと言へば、さればよかゝる事言ふにもかくむづかしく、かど〳〵しけは百千歳生きたりともいかで、やさしき言葉のはしも得んやとて人皆あざけり、笑ひけるとぞ。

その頃玄齋左のざれ歌をよみたりき

皆人は花の都にのぼるなり我は居ながら名歌をぞ詠む

當時の世情は實にうるさく、頭角を抽んでるなどは容易の事でなく、そうした努力をしてもかへつて不利な立場に陷ちいる傾向のあつたのは、舊藩時代の實情でもあつた、格式を極度に重んじた、そしてそれに依つて、秩序が保たれのだから止むを得ない、公卿に歌の添削を乞ふなども當時にあつて、如何にもものゝしく仰山に考へられたかは、此一例によつても知られる、魯道和尚或時白井家を訪問した時に、千代梅に庭田大納言に師事してはどうかと、すゝめた時なども周圍の思惑は如何あらんと世間の評判になる事を恐れた、今日に於ては我々の想像されぬ心理狀態である、尙山比子の書翰の一二所藏中より載せる事にする。

○

貴札致拜見候彌御安全被成御越年珍重之至奉存候御宿所無御別條候間御安堵可被成候隨て老夫無事加年いたし候年始御祝詞の御紙面恭奉存候　恐惶謹言

二月十三日　　建部山比子

藤原嘉郎様　貴報

龜紙御返報畧儀の至御免被下候

秋冷相催候へども彌御家内様御揃御健御暮奉恭喜候昨日御再勸御仰出候趣承り申候彌御本望の至目出度奉存候私共も乍蔭悅罷在候御家内様御悅奉察候以參御祝儀可申上候へ共遲引可申候間先紙面にて御悅得貴意候皆様へも宜家内も同様申上候　以上

八月十八日　　建部山比子

佐藤岩治様

玄齋は山比子を手紙も滿足に書けないと言ふやうな事を病間雜抄の中に載せて居る、事實山比子の手紙は實用を主としたもので、閑文字は少しも見當らない、玄齋は和文様の手紙に歌を誌るしたりして書いたものを多く見うけるのである、山比子は多くの子弟に敎授し閑文字に遊ぶ時間がなかつたのであらう、又性格としてそうした閑文字を弄する事は好まなかつたらしい。

後記

莊内の歌人として建部山比子は、時代も新しく作歌の批判的立場から第一人者とは言へな

い、たゞ私をして莊内歌人研究の動機をなさしめたので、第一編とした。
齋藤治兵衛翁から山比子歌集を借りたのは昭和九年である、翁も今は和歌山縣に去り敎を受ける由もなくなつた。
清晃清民、二代に亘る國學家を出した星川清躬君からは、鄕土關係の歌集文集其他の材料を拜借し、長谷川伊織君に筆寫して貰うた、其後星川家は火災に罹りやがて異鄕に去る事になつた、長谷川伊織君も他界した。
魯道和尙に關し飽海郡本楯村の松本藤十郎氏は自分の事のように骨を折つて附近の寺院等より材料を蒐集し便宜を與えて吳れられた、略稿を終り一覽に供したいと思つて居つたのに、突如一夜にして亡くなられた事を聞いた。
近來星川清民の歿後、鈴木重胤其他の慰靈祭を毎年自宅に於て營み、鄕土文化に貢献を期待された大山町の大瀧直之助君もぽつくり亡くなつた。
建部家先代の未亡人は私の訪問した時は、至つて健康そうに見え、物腰の柔な人であつた其後この人も亡くなられたと聞いた。
爰數年間に鄕土史料關係に於て、多く失はれた事を思ひ、今日莊内歌人研究を企てたとしたら計劃は頗る狹い範圍になつたと考へられる、數年前に着手した事を天祐と感謝して居る。
本書を纒める上に山比子の門人であつた、佐藤行道の後裔西田川郡東鄕村佐藤東藏氏からは、貴重なる材料の數々を拜借した、酒田の光丘文庫にもしばし足を運んで便宜を與えて貰うた。
山比子と玄齋を並べ考へると明治大正に於ける正岡子規の門人伊藤左千夫、長塚節を聯想される、節の左千夫追悼號に書いたものを讀むと(アララキ、及節全集)性格的に山比子と左千夫、玄齋と節は相似点を發見する。
私は素養を缺いた事と、公餘の寸暇に書いた事は本書を頗る蕪雜にし且三十二頁迄は誤植も多い、其以後九十八頁迄は白井さんに校正して戴いた、私の原稿は讀みにくいので文撰の日野さんにも苦勞をかけた、爰に故人の冥福を祈り、助力を賜ふた各位に感謝の意を表す。

昭和十四年四月廿五日　印刷
昭和十四年五月一日　發行
〔定價金六拾錢〕

著者　上野甚作

發行者　山形縣鶴岡市鳥居町甲三一
三浦與吉

印刷所　山形縣鶴岡市鳥居町甲三一
莊內活版所

莊內歌人研究豫告

第一編　建部山比子
第二編　杉山廉女
第三編　白井固
第四編　魯道和尚
第五編　照井長柄
第六編　志田義貫
第七編　星川清晃
第八編　廣瀨嚴雄
第九編　池田玄齋
第十編　白井玉井
白井千代女

終